

高知県埋蔵文化財センター年報

4

1994年度

1995

財団法人 高知県文化財団
埋蔵文化財センター

巻頭カラー



長畝3号墳全景



具同中山遺跡群 I 全景

序

本年度の主だった事業としては、四国横断自動車道関連遺跡、中村宿毛道路建設に伴う具同中山遺跡群、あけぼの道路関連遺跡等の調査が行われました。調査件数としては昨年度とほぼ同数でしたが、四国横断自動車道関連では、奥谷南遺跡・長畝3号墳・福井遺跡と3遺跡の本調査が行われており、発掘調査も本格化してまいりました。また、あけぼの道路関連遺跡は新たな事業として本年度から着手され、さらに今後も県土の開発に伴い発掘調査事業の増加が考えられます。このような状況を受けて、調査員の人員増も行われ、調査体制の強化が図られました。

平成6年度における県下の発掘調査の中では、南国市の長畝3号墳が、高知県では数少ない古墳時代前期の古墳として注目され、奥谷南遺跡では縄文時代後期のドングリピットが発見されています。中村市の具同中山遺跡群では鉄剣の出土があり、古墳時代の祭祀関係として新たな資料を提供しています。あけぼの道路では弥生時代・中近世の資料が検出されており、貴重な成果を得ることができました。これらの成果は、各発掘調査の現場で記者発表や現地説明会を通じて公表することにより、地元の方々をはじめとし、県民の皆様に埋蔵文化財への理解を深める一助になったものと考えます。また、高知市教育委員会との共催により柳田遺跡展を開催することができ、広報・普及活動も進めることができました。

発掘調査事業を中心に普及・啓蒙事業等を進めるうえでは、関係者各位のご協力とご支援があればこそ成果をあげることができたと考えますので、今後も皆様のさらなるご指導、ご援助をお願い致します。

最後になりましたが、本書は平成6年度の事業概要をまとめたものであり、今後の埋蔵文化財保護の推進とその保存と活用のための一助となれば幸いです。また、事業の実施にあたってご協力を頂いた皆様にお礼を申し上げます。

平成7年7月

財団法人高知県文化財団
埋蔵文化財センター
所長 原 雅彦

目 次

序

I 財団法人高知県文化財団	1
1. 財団法人高知県文化財団の概要	
2. 財団法人高知県文化財団の組織	
II 埋蔵文化財センター	3
1. 埋蔵文化財センターの概要	
2. 埋蔵文化財センターの組織	
III 年間事業の概要	5
1. 発掘調査事業	
2. 発掘調査報告書刊行・資料管理事業	
3. 普及啓蒙事業	
4. 研修事業他	
IV 発掘調査概要報告	15
V 条例・規則・規程等	45

例 言

1. 本書は財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センターの平成6年度(1994)事業の概要をまとめたものである。
2. 発掘調査については、当センターの受託事業、派遣事業以外にも県教委及び市町村教委で実施した調査も、県下の状況を把握するために集録した。
3. IVの発掘調査概要については、各担当者が執筆した。また、その他の執筆、編集は森田尚宏が取りまとめた。

I 財団法人高知県文化財団

1. 財団法人高知県文化財団の概要

(1) 設立趣旨

近年、所得水準の向上や自由時間の増大など社会経済情勢の変化を背景に、芸術文化活動に直接参加し、或いは歴史的・文化的遺産に自ら親しむことを通じて、生活の中に潤いとやすらぎを求めるといった県民の文化的ニーズがかつてなく高まってきている。

このような時代のすう勢の中で、これからの文化行政は、より県民の期待に応えるものでなければならないが、特に、その推進に当たっては、単に行政のみが主導していくのではなく、行政と民間がそれぞれの叡智、力を出し合い、一致協力していくことがなによりも必要である。

高知県文化財団は、こういった使命と目的のもとに、県民文化の振興に資する芸術文化関連諸事業を、県、市町村、民間の力を幅広く結集して総合的、体系的に運営実施すると共に、県民の文化活動の拠点となる各種の芸術文化施設についてもその特性を活かし、公共性を確保しつつ、県民サービスの向上につながる、柔軟で弾力的な管理運営を行うなど、今後の本県の芸術文化活動の推進母体としての役割を担おうとするものである。

(2) 事業内容

- 1) 音楽、演劇、美術その他の芸術文化事業
- 2) 教育、学術及び文化の国際交流事業
- 3) 歴史民俗資料館、美術館等芸術文化施設の管理運営事業
- 4) 埋蔵文化財の調査研究、整理保存、展示等の事業
- 5) その他文化振興に関する事業

(3) 設立年月日

平成2年3月28日

(4) 事務局所在地

高知県 高知市高須353-2

高知県立美術館内

2. 財団法人高知県文化財団の組織

(1) 財団組織

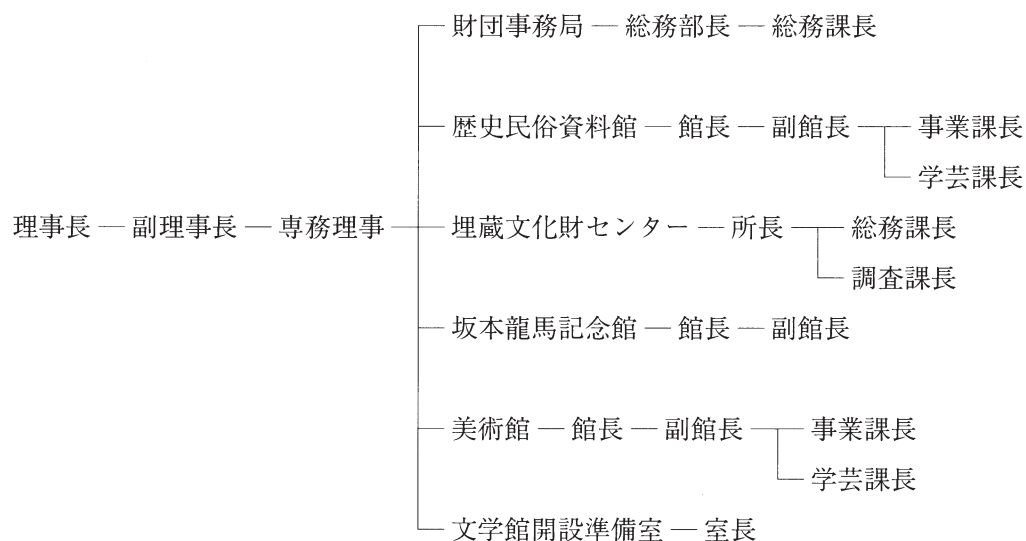
1) 理事会役員

理事長 1 名 副理事長 2 名 専務理事 1 名 理事 7 名 監事 2 名

2) 事務局

総務部長（専務理事）－総務課長（美術館副館長）－事務職員

3) 財団組織図



(2) 財団役員

役職名	氏名	備考
理事長	橋本 大二郎	高知県知事
副理事長	山口 勝己	高知県教育長
副理事長	濱田 耕一	四国銀行頭取
専務理事	小橋 一民	高知県教育委員会事務局参事
理事	横山 龍雄	高知市長
理事	筒井 直和	吾北村長
理事	橋井 昭六	高知新聞社社長
理事	吉村 真一	高知県商工会議所連合会会頭
理事	清水 泉	高知銀行頭取
理事	渡辺 文雄	高知県総務部長
理事	近藤 美佐	高知地方裁判所民事調停委員
監事	木下 武良	高知県教育委員会事務局教育次長
監事	森田 毅	高知市収入役

Ⅱ 埋蔵文化財センター

1. 埋蔵文化財センターの概要

(1) 設立趣旨

財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センターは、高知県における埋蔵文化財の調査研究及び資料の保存管理を行うとともに、埋蔵文化財愛護思想の普及啓蒙を図り、本県の文化振興に寄与することを目的とする。

(2) 事業内容

1) 埋蔵文化財の発掘調査

県内における遺跡の発掘調査を行い報告書を刊行する。

2) 埋蔵文化財の保存管理

発掘調査等による出土遺物、調査記録等の整理及び保管を行う。

3) 埋蔵文化財の研究・普及啓蒙

埋蔵文化財について調査研究を行うとともに、その成果をもとに出土遺物の公開展示、現地説明会及び展示会の開催等により、埋蔵文化財愛護思想の普及啓蒙を図る。

4) 埋蔵文化財に関する資料収集及び情報提供に関すること

5) 高知県立埋蔵文化財センターの管理・運営に関すること

(3) 設立年月日

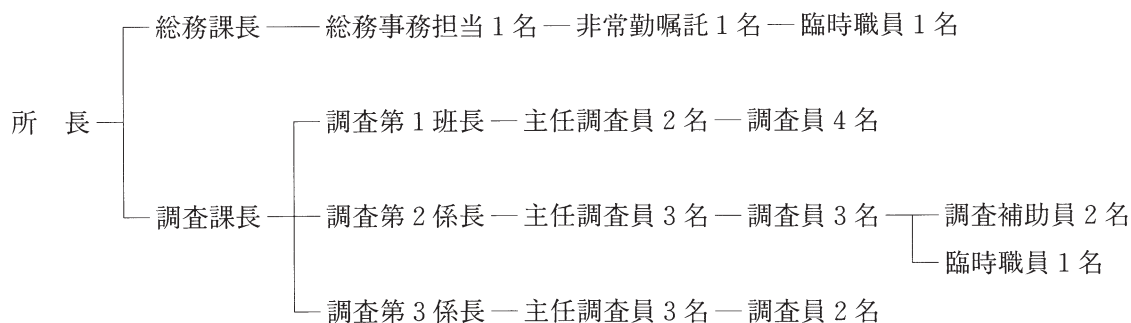
平成3年4月1日

(4) 埋蔵文化財センター所在地

高知県南国市篠原南泉 1437-1

2. 埋蔵文化財センターの組織

(1) 埋蔵文化財センター組織図



(2) 埋蔵文化財センター職員

職 名		氏 名	備 考	
所 長		原 雅 彦	高知県教育委員会文化振興課副参事	
総 務 課 長		井 上 幸 雄	高知県教育委員会文化振興課主監	
総務担当	主 幹	三 浦 康 寛	高知県教育委員会文化振興課主幹	
	非 常 勤 嘱 託	西 岡 禎 子	高知県文化財団嘱託職員	
	臨 時 職 員	伊 藤 そ の	高知県文化財団臨時職員	
調 査 課 長		明 神 睦 起	高知県教育委員会文化振興課主監	
調 査 担 当	調 査 第 1 班	調 査 第 1 班 長	山 本 哲 也	高知県教育委員会文化振興課主監
		主 任 調 査 員	小 嶋 博 満	高知県教育委員会文化振興課社会教育主事
		主 任 調 査 員	廣 田 佳 久	高知県教育委員会文化振興課主幹
		調 査 員	松 村 信 博	高知県教育委員会文化振興課社会教育主事
		調 査 員	江 戸 秀 輝	高知県教育委員会文化振興課社会教育主事
		調 査 員	池 澤 俊 幸	高知県教育委員会文化振興課社会教育主事
		調 査 員	坂 本 憲 昭	高知県文化財団職員
	調 査 第 2 係	調 査 第 2 係 長	森 田 尚 宏	高知県教育委員会文化振興課主幹
		主 任 調 査 員	宮 地 早 苗	高知県教育委員会文化振興課社会教育主事
		主 任 調 査 員	松 田 直 則	高知県教育委員会文化振興課主幹
		主 任 調 査 員	田 上 浩	高知市教育委員会総務課指導主事
		調 査 員	伊 藤 強	高知県教育委員会文化振興課社会教育主事
		調 査 員	山 崎 正 明	高知県教育委員会文化振興課社会教育主事
		調 査 員	曾 我 貴 行	高知県文化財団職員
調 査 第 3 係	調 査 補 助 員	武 吉 眞 裕	高知県文化財団嘱託職員	
	調 査 補 助 員	竹 村 三 菜	高知県文化財団嘱託職員	
	臨 時 職 員	山 崎 詠 子	高知県文化財団臨時職員	
	調 査 第 3 係 長	出 原 恵 三	高知県教育委員会文化振興課主幹	
	主 任 調 査 員	佐 竹 寛	高知県教育委員会文化振興課社会教育主事	
	主 任 調 査 員	泉 幸 代	高知県教育委員会文化振興課社会教育主事	
調 査 第 3 係	主 任 調 査 員	前 田 光 雄	高知県教育委員会文化振興課主幹	
	調 査 員	藤 方 正 治	高知県文化財団職員	
	調 査 員	吉 成 承 三	高知県文化財団職員	

Ⅲ 年間事業の概要

1. 発掘調査事業

開設4年目となり、当センターの体制も整備されてきたところである。昨年度に整備された所長以下、総務課、調査課の2課体制も充実し、新たな調査に向けて進むこととなった。調査員は、高知空港拡張整備事業等の大規模開発に関連し4人の増員がなされ、合計19人となった。さらに、本年度には高知市教育委員会からの派遣職員1名の配置があり、市町村における埋蔵文化財担当職員として発掘調査全般の研修を行っている。また、南国市教育委員会からも年度途中からではあるが研修のため職員1名の派遣があった。

発掘調査事業は後述するようにやはり増加しており、今後高速道路関連、国道バイパス関連、空港拡張関連等の事業が最盛期となることから、他の派遣事業等も含めて考えれば、専門調査員の増員と市町村における埋蔵文化財保護に対しての積極的な取り組みが望まれるところである。

(1) 受託事業

平成6年度の受託事業は、発掘調査及び整理作業を含めて10件であり、国（建設省）、日本道路公団、県、県教委からの受託であった。10件中本調査は7件であり、残り3件が整理作業である。また、本調査3件と整理作業3件の計6件が日本道路公団からの受託であり、本年度の発掘調査受託事業の中心となっている。調査面積は、合計約28,233㎡であった。

建設省関係の受託事業としては、継続的に行っている中村宿毛道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査である具同中山遺跡群の調査が開始された。具同中山遺跡群は中筋川の河川流域に広範囲に広がる遺跡であり、中村宿毛道路建設範囲内の試掘調査の結果、3箇所の遺物集中地点が確認されている。調査は、この3地点について平成6年度から3年間の継続事業として実施することとなり、本年度は西部地区を対象として、具同中山遺跡群Ⅰに着手した。

日本道路公団関係では、四国横断自動車道建設に伴い、南国～伊野間の南国高知工区を対象とした発掘調査が実施された。対象となった遺跡は、昨年度に試掘調査を行った福井遺跡、奥谷南遺跡と長畝3号墳であり、本調査が行われた。この他、整理作業としては、昨年度に本調査が行われた尾立遺跡、栄エ田遺跡、長畝遺跡を対象としており、高速道路関係の調査の比率が高くなっている。

県関係では、坂本ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査として、昨年度に試掘調査を行った池ノ上遺跡及び楠山遺跡の本調査が行われた。また、南国市と土佐山田町の間を結ぶ国道195号の拡幅新設である「あけぼの道路」の工事に伴う埋蔵文化財発掘調査が本年度から継続事業として開始され、本年度は小籠遺跡の発掘調査と整理作業及び来年度へ向けての試掘調査が行われた。また、高知城跡の市立動物園跡地である御台所屋敷跡について、史跡整備に伴う確認調査が県教委からの委託により実施された。

以上のように、受託事業の件数は昨年度に比べると少なくなっているが、調査面積は2倍以上と

増加しており、高速道路関連調査の増加とあけぼの道路関連調査の開始がその主要な要因である。

(2) 調査員派遣事業

調査員派遣による発掘調査は、県教育委員会からの派遣1件を含めて21件であり、昨年度に比べればやや増加しているが、調査面積は7,873㎡と半減している。その他に土佐山田町主体の調査が5件行われており、調査面積は2,777㎡であった。派遣対象となった調査は、国庫補助事業による確認調査を中心に、圃場整備事業に伴う試掘及び本調査、その他小規模な宅地開発及び個人住宅等であり、圃場整備事業に伴う発掘調査面積が昨年度より大幅に減少している。

これらの調査の中で、国庫補助事業等の学術・確認調査として行われたの9件であり、調査面積は3,554㎡であった。

南国市一比江廃寺跡 南国市一岩村遺跡群 高知市一柳田遺跡
 本山町一松ノ木遺跡 葉山村一姫野々城跡 大野見村一宮野々遺跡
 十和村一十川駄場崎遺跡 窪川町一窪川西部遺跡群 大月町一ナシヶ森遺跡

圃場整備事業に伴う緊急調査への調査員派遣は4件であり、調査面積は3,452㎡であった。

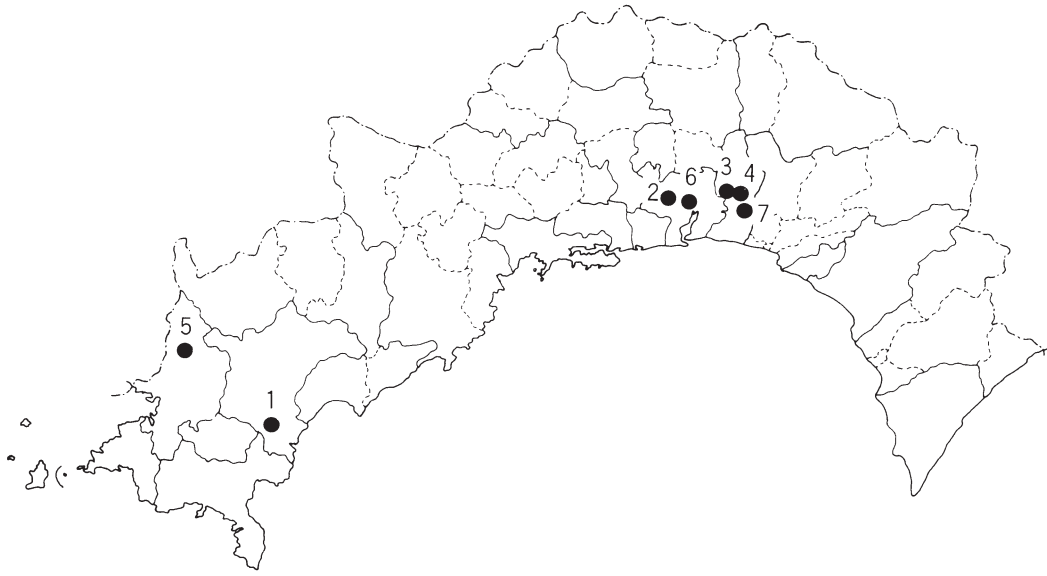
野市町一深淵北遺跡 野市町一下ノ坪遺跡 東津野村一東川遺跡 大方町一曾我城跡
 その他小規模開発等に伴う派遣は8件であり、調査面積は867㎡であった。

高知市一柳田遺跡（糍原・中ノ坪Ⅰ・Ⅱ） 高知市一高知城跡（大手門堀・北石垣）
 南国市一土佐国府跡 本山町一永田遺跡 高知市一介良中野遺跡

また、県教育委員会を中心として立会調査等が12件行われており、調査面積は2,160㎡であった。

平成6年度 受託発掘調査事業

番号	遺跡名	調査略号	所在地	時代	種別	調査面積 (㎡)	調査期間	原因	委託者	調査主体
1	具同中山遺跡群Ⅰ	94-1 GN	中村市具同字中山	縄文～中世	祭祀集落跡	5,527	H 6.4月～ H 7.2月	国道建設	建設省 (県教委)	(財)高知県文化財団 埋蔵文化財センター
2	福井遺跡	94-2 FK	高知市福井字大谷屋敷	縄文～中世	集落跡	5,000	H 6.4月～ H 7.2月	高速道路建設	道路公団	(財)高知県文化財団 埋蔵文化財センター
3	長畝3号墳	94-3 NN	南国市岡豊町定林寺字長畝	弥生・古墳	古墳	1,600	H 6.6月～ H 6.12月	高速道路建設	道路公団	(財)高知県文化財団 埋蔵文化財センター
4	奥谷南遺跡	94-4 NOM	南国市岡豊町小蓮字奥谷南	縄文～近世	集落跡	5,400	H 6.4月～ H 7.3月	高速道路建設	道路公団	(財)高知県文化財団 埋蔵文化財センター
5	池ノ上・楠山遺跡	94-12 SI・SK	宿毛市橋上町楠山	旧石器～縄文	散布地	1,270	H 6.7月～ H 6.10月	ダム建設	高知県	(財)高知県文化財団 埋蔵文化財センター
6	高知城跡(御台所屋敷跡)	94-13 KC	高知市丸ノ内	近世	城跡	930	H 6.7月～ H 6.9月	史跡整備	県教委	(財)高知県文化財団 埋蔵文化財センター
7	小籠遺跡	94-14 RNK	南国市岡豊町小籠	弥生～近世	集落跡	8,506	H 6.7月～ H 6.12月	国道建設	高知県	(財)高知県文化財団 埋蔵文化財センター
8	栄工田遺跡	(93-3 SE)	南国市岡豊町定林寺字栄工田	縄文～近世	集落跡	—	H 6.4月～ H 7.3月	高速道路建設 (整理作業)	道路公団	(財)高知県文化財団 埋蔵文化財センター
9	長畝遺跡	(93-18 NN)	南国市岡豊町定林寺字長畝	弥生～古墳	土坑墓	—	H 6.4月～ H 7.3月	高速道路建設 (整理作業)	道路公団	(財)高知県文化財団 埋蔵文化財センター
10	尾立遺跡	(93-19 KH)	高知市尾立	弥生～近世	集落跡	—	H 6.4月～ H 7.3月	高速道路建設 (整理作業)	道路公団	(財)高知県文化財団 埋蔵文化財センター



平成6年度 受託発掘調査位置図



具同中山遺跡群 I



奥谷南遺跡



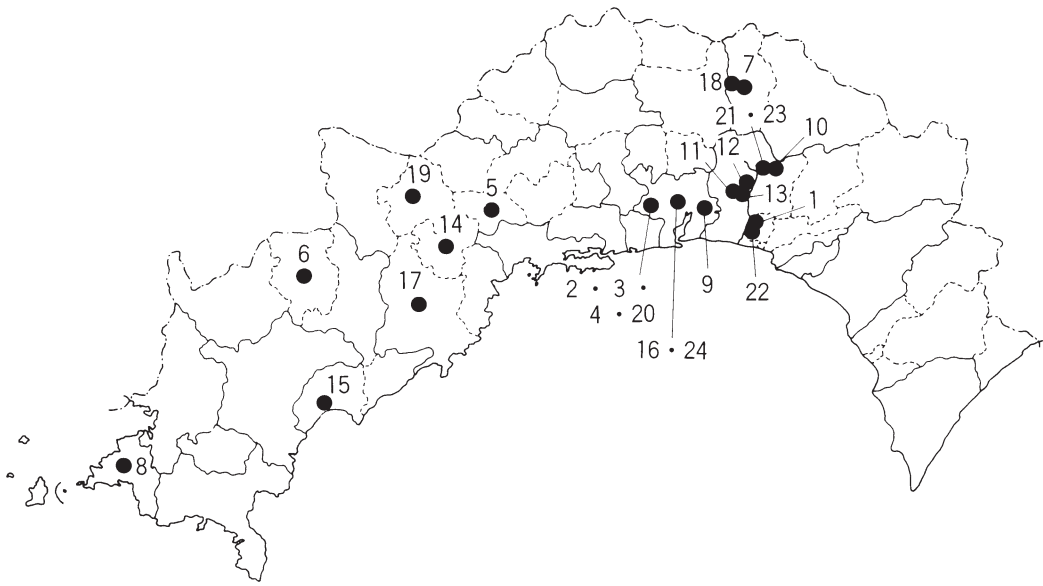
高知城跡



池ノ上遺跡

平成6年度 調査員派遣発掘調査事業他

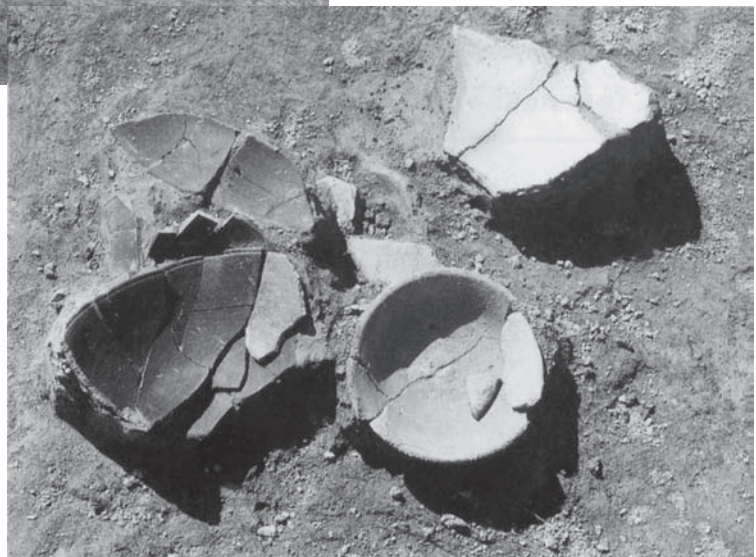
番号	遺跡名	調査略号	所在地	時代	種別	調査面積 (㎡)	調査期間	原因	原因者	調査主体
1	深湖北遺跡	94-5 FK	香美郡野市町父養寺	古代	集落跡	1,800	H 6.9月～ H 9.12月	県営圃場整備	高知県	野市町教育委員会
2	柳田遺跡(糶原地区)	94-6 KY 1	高知市朝倉字糶原	古墳～ 中世	散布地	24	H 6.6月	宅地開発	民間	高知市教育委員会
3	柳田遺跡(中ノ坪地区Ⅰ)	94-7 KY 2	高知市朝倉字中ノ坪	—	—	24	H 6.8月	宅地開発	民間	高知市教育委員会
4	柳田遺跡(沖田地区)	94-8 KY 3	高知市朝倉字沖田	縄文・ 弥生・ 近世	散布地	1,088	H 6.10月～ H 6.12月	公園建設	高知市	高知市教育委員会
5	姫野々城跡	94-9 HH	高岡郡葉山村姫野々	中世	城跡	200	H 6.5月～ H 6.8月	確認調査	葉山村	葉山村教育委員会
6	十川駄場崎遺跡	94-10 TD 6	幡多郡十和村十川	縄文	集落跡	30	H 6.6月～ H 6.8月	確認調査	十和村	十和村教育委員会
7	永田遺跡	94-11 MN	長岡郡本山町本山字永田	縄文～ 近世	集落跡	400	H 6.6月	店舗建設	民間	本山町教育委員会
8	ナシヶ森遺跡	94-15 ON	幡多郡大月町弘見字ナシヶ森	旧石器・ 縄文	散布地	80	H 6.8月～ H 6.10月	確認調査	大月町	大月町教育委員会
9	介良中野遺跡	94-16 KN	高知市介良字二ツ池	近世	散布地	50	H 6.9月	個人住宅	民間	高知市教育委員会
10	林ノ谷1号窯跡	94-17 YH1	香美郡土佐山田町新改字林ノ谷	古代	窯跡	65	H 6.7月～ H 6.9月	確認調査	土佐山田町	土佐山田町教育委員会
11	土佐国府跡	94-18 TK	南国市比江字和尚	古代	官衙	110	H 6.10月	個人住宅	民間	南国市教育委員会
12	岩村遺跡群	94-19 NI	南国市福船	弥生～ 中世	集落跡	256	H 6.10月～ H 7.1月	県営圃場整備 (試掘調査)	高知県	南国市教育委員会
13	比江廃寺跡	94-20 NH	南国市比江	古代	寺院跡	340	H 7.1月～ H 7.2月	確認調査	高知県	高知県教育委員会
14	宮野々遺跡	94-21 OM	高岡郡大野見村奈路	弥生・ 古墳	集落跡	350	H 6.10月～ H 6.12月	確認調査	大野見村	大野見村教育委員会
15	曾我城跡	94-22 SC	幡多郡大方町浮鞆字城ノ谷	中世	城跡	384	H 6.10月～ H 6.12月	国営農地造成 (試掘調査)	農水省・ 大方町	大方町教育委員会
16	高知城跡(追手門堀)	94-23 KC	高知市丸ノ内	近世	城跡	81	H 6.11月	現状変更(確認調査)	高知県	高知県教育委員会
17	窪川西部遺跡群	94-24 KS	高岡郡窪川町神ノ西家地川	縄文・ 中世	散布地	660	H 6.10月～ H 6.12月	県営圃場整備 (試掘調査)	高知県	窪川町教育委員会
18	松ノ木遺跡	94-25 MMV	長岡郡本山町寺家	縄文～ 中世	集落跡	550	6.11月～ H 7.3月	確認調査	本山町	本山町教育委員会
19	東川遺跡	94-26 HH	高岡郡東津野村東川	縄文	散布地	50	H 6.12月	圃場整備	東津野村	東津野村教育委員会
20	柳田遺跡(中ノ坪地区Ⅱ)	94-27 KY 4	高知市朝倉字中ノ坪	縄文～ 中世	散布地	140	H 6.12月	宅地開発	民間	高知市教育委員会
21	須江ツカアナ古墳	94-28 YST	香美郡土佐山田町須江字ツカアナ	古墳	古墳	1,400	H 6.12月～ H 7.1月	県営圃場整備	高知県	土佐山田町教育委員会
22	下ノ坪遺跡	94-29 NS	香美郡野市町上岡字下ノ坪	弥生～ 古代	集落跡	1,218	H 7.1月～ H 7.3月	団営圃場整備	野市町	野市町教育委員会
23	上改田遺跡	94-30 YKU	香美郡土佐山田町上改田字後神母	弥生～ 中世	集落跡	1,000	H 6.9月～ H 6.12月	県営圃場整備	高知県	土佐山田町教育委員会
24	高知城跡(北石垣)	94-31 KC	高知市丸ノ内	近世	城跡	38	H 7.3月	現状変更(確認調査)	高知県	高知県教育委員会
25	岩村地区遺跡群	94-32 YI	香美郡土佐山田町蔵福寺島	古代・ 中世	散布地	240	H 7.3月	県営圃場整備 (試掘調査)	高知県	土佐山田町教育委員会
26	須江北遺跡	94-33 YSK	香美郡土佐山田町須江	古墳～ 中世	散布地	72	H 6.10月	県営圃場整備	高知県	土佐山田町教育委員会



平成6年度 調査員派遣発掘調査他位置図



永田遺跡



深淵北遺跡

2. 発掘調査報告書刊行・資料管理事業

平成6年度の整理作業は、昨年度の四国横断自動車道及び中村宿毛道路関連遺跡の発掘調査資料と当該年度に発掘調査を実施した遺跡について実施され、報告書の刊行を行った。調査面積の増加に伴いやはり整理作業が遅れ気味であり、事業計画中に整理作業期間も確保されているが、実質的には年度途中に急遽対応しなければならない調査もあり、当初計画のとおり作業が進まない場合が見受けられる。

資料の保管・管理については、平成5年度の施設の完成を受けて従前の収蔵資料の整理を行っているが、調査の間での作業であり十分進んでいるとは言えない。

発掘調査資料以外の資料としては、本年度も関係図書の購入を行った。また、埋蔵文化財センターにおいて受け入れた寄贈報告書及び図書の整理を行うとともに、県教育委員会において寄贈等を受けた報告書・図書についても埋蔵文化財センターにおいて保管・管理を行っている。

また、本年度における報告書の刊行及び遺物・写真等の貸し出しは以下のとおりであった。

平成6年度 埋蔵文化財センター刊行報告書

シリーズ名	書名	所在地	発行者	執筆・編集者
高知県埋蔵文化財発掘調査報告書第19集	浦戸城跡	高知市浦戸	(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター	吉成
高知県埋蔵文化財発掘調査報告書第20集	小籠遺跡Ⅰ	南国市小籠	(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター	出原・泉・藤方
高知県埋蔵文化財発掘調査報告書第21集	高知城跡	高知市丸ノ内	(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター	曾我・宮地
高知県埋蔵文化財発掘調査報告書第22集	栄エ田遺跡	南国市岡豊町定林寺	(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター	松村
高知県埋蔵文化財発掘調査報告書第23集	尾立遺跡	高知市尾立	(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター	江戸

平成6年度 県・市町村教育委員会刊行報告書

シリーズ名	書名	所在地	発行者	執筆・編集者
本山町埋蔵文化財調査報告書 第7集	永田遺跡	長岡郡本山町本山	本山町教育委員会	出原・佐竹・藤方
佐川町埋蔵文化財発掘調査報告書第1集	岩井口遺跡 二ノ部遺跡・城跡	高岡郡窪川町西組	佐川町教育委員会	廣田
佐川町埋蔵文化財発掘調査報告書第2集	岩井口遺跡Ⅱ	高岡郡窪川町西組	佐川町教育委員会	廣田

平成6年度 遺物等発掘調査資料の貸出

番号	借用者	貸出期間	貸出資料	貸出者
1	越知町立明治中学校	平成6年6月20日～6月30日	縄文土器鉢、弥生土器壺、須恵器杯・高杯・甗、土師器椀・壺、手づくね土器、土製勾玉、石製勾玉、石鏃、石斧、石庖丁	(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター
2	愛知県陶磁資料館	平成6年6月20日～平成7年3月31日	能茶山焼皿・椀20点	(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター
3	天理市教育委員会	平成6年9月6日～11月	田村遺跡群水田跡写真	(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター
4	徳島県立博物館	平成6年9月12日～11月23日	田村遺跡群水田跡写真	(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター
5	高知西高等学校	平成6年9月17・18日	縄文土器鉢、弥生土器壺、須恵器杯・高杯・甗、土師器椀・壺、手づくね土器、土製勾玉、石製勾玉、石鏃、石斧、石庖丁	(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター

3. 普及啓蒙事業

本年度も、普及啓蒙事業は発掘調査に伴う記者発表と現地説明会を中心に実施された。年度末には高知市教育委員会の主催で行われた「柳田遺跡展」の共催を行った。また、随時発掘調査現場及び埋蔵文化財センターの見学等に対応するとともに、各種研修会等への講師派遣を行ったが、埋蔵文化財センター独自の広報普及活動は現在行われていないことから今後の推進が必要である。

(1) 記者発表・現地説明会

発掘調査に伴う記者発表及び現地説明会が8遺跡で行われ、現地説明会では30～300名の参加があった。特に長畝3号墳の現地説明会では、県内でも貴重な前期古墳の調査であったことから県外からの見学者も多く、参加者は300名にのぼり盛況であった。他の現地説明会においても地元の方々の参加も多くみられ、埋蔵文化財保護についての関心も高まっているのではないかと考えられる。

平成6年度 現地説明会等開催

番号	遺跡名	内容	開催日	会場	主催	参加人数
1	奥谷南遺跡	記者発表	平成6年9月1日(木)	南国市岡豊町小蓮字奥谷南	埋蔵文化財センター	—
2	奥谷南遺跡	現地説明会	平成6年9月3日(土)	南国市岡豊町小蓮字奥谷南	埋蔵文化財センター	280名
3	高知城跡	記者発表	平成6年9月29日(木)	高知市丸ノ内	埋蔵文化財センター	—
4	高知城跡	現地説明会	平成6年10月1日(土)	高知市丸ノ内	埋蔵文化財センター	80名
5	小籠遺跡	記者発表	平成6年11月17日(木)	南国市岡豊町小籠	埋蔵文化財センター	—
6	小籠遺跡	現地説明会	平成6年11月19日(土)	南国市岡豊町小籠	埋蔵文化財センター	100名
7	長畝3号墳	記者発表	平成6年11月18日(金)	南国市岡豊町定林寺字長畝	埋蔵文化財センター	—
8	長畝3号墳	現地説明会	平成6年11月20日(日)	南国市岡豊町定林寺字長畝	埋蔵文化財センター	300名
9	須江ツカアナ古墳	記者発表	平成7年1月14日(土)	香美郡土佐山田町須江字ツカアナ	土佐山田町教育委員会	—
10	須江ツカアナ古墳	現地説明会	平成7年1月16日(月)	香美郡土佐山田町須江字ツカアナ	土佐山田町教育委員会	70名
11	松ノ木遺跡	記者発表	平成7年2月24日(土)	長岡郡本山町寺家	本山町教育委員会	—
12	松ノ木遺跡	現地説明会	平成7年2月25日(日)	長岡郡本山町寺家	本山町教育委員会	100名
13	奥谷南遺跡	記者発表	平成7年2月8日(水)	南国市岡豊町小蓮字奥谷南	埋蔵文化財センター	—
14	福井遺跡	記者発表	平成7年3月7日(火)	高知市福井	埋蔵文化財センター	100名
15	福井遺跡	現地説明会	平成7年3月11日(土)	高知市福井	埋蔵文化財センター	—



長畝3号墳



福井遺跡

(2) 展示会等

平成6年度の普及活動としては、平成4年度に発掘調査が行われた柳田遺跡について、高知市教育委員会との共催により遺跡展を行った。センター開設以後、高知県立歴史民俗資料館と共催で例年行っていた特別展は考古関係以外であり、本年度は展示が行われなかった。また、研究会等として古代学協会四国支部大会、中四国旧石器文化談話会が高知において開催されている。

発掘調査、埋蔵文化財センター施設見学等も依頼はさほど多くはなかったが、例年と同様に行われ、調査資料の県外からの視察・調査などもあり、普及活動に努めた。

● 展示会名 「柳田遺跡展」—今、あきらかとなる朝倉の原始・古代—

会 場 フジグラン高知

期 間 平成7年1月21日～1月29日

入場者数 7,481人

	子供(高校生以下)	大 人	合 計	アンケート数
21 (土)	239	688	927	38
22 (日)	648	1,461	2,109	50
23 (月)	84	458	542	22
24 (火)	48	295	343	17
25 (水)	101	448	549	17
26 (木)	51	320	371	14
27 (金)	72	343	415	14
28 (土)	250	693	943	27
29 (日)	366	916	1,282	48
合 計	1,859	5,622	7,481	247

○ アンケート結果

1. 遺跡展を何によって知りましたか。

- ・高知市広報「あかるいまち」・・・26名
- ・ちらし・・・・・・・・・・・・・・・・58名
- ・テレビ・ラジオのニュース・・・56名
- ・新聞記事・・・・・・・・・・・・62名
- ・その他・・・・・・・・・・・・73名

2. 展示内容・解説はどうでしたか。

- ・非常にわかりやすかった・・・103名
- ・適切であった・・・・・・・・・・96名
- ・やや難しかった・・・・・・・・27名
- ・難しかった・・・・・・・・・・12名

3. 市内の遺跡の保存について

- ・積極的に保存すべきだ・・・・・・・・183名
- ・関心はあるが現代の生活のためには壊されても仕方がない・・・25名
- ・保存よりも開発を優先すべきだ・・・・・・・・6名
- ・どちらとも言えない・・・・・・・・23名

○ アンケートの主な意見・感想

- ・内容が貴重で、展示もしっかりしている。このような展示は続けてほしい。 (30歳男)
- ・鏡川流域のこのあたりに集落があった事は学んでいたが、これ程の土器や木製品が発掘されているのには驚かされた。 (48歳女)
- ・発掘された場所での展示はたいへん良かった。常設展示してほしい。 (52歳女)
- ・開発の余地を残す高知市郊外の平野部でも今後重要な埋蔵文化財の発見が相次ぐであろう事を実感し得る展示構成です。 (42歳男)
- ・木製品の保存状態の良さにはおどろいた。こういう展示を1ヶ所だけではなく、市内何か所を巡回できたらいいのでは。 (23歳女)
- ・とてもわかりやすく、出土品の形がきれいに残っているのでびっくりしました。いつでも市民がみられるようにこれからも展示してほしい。 (13歳女)



柳田遺跡展



● 研究会等

「第8回 古代学協会・四国支部大会」

会 場 高知県立美術館ホール
日 時 平成6年6月25・26日
参加者 300名

「第11回 中四国旧石器文化談話会」

会 場 高知県立歴史民俗資料館AVホール
日 時 平成6年9月10・11日
参加者 45名

「平成6年度 全国埋蔵文化財法人連絡協議会 中国・四国・九州ブロック会議」

会 場 高知縣市町村職員共済会館
日 時 平成6年11月10・11日
参加者 40名

● 遺跡・施設見学等

「鴨部地区センター 親子史跡巡り」

場 所 奥谷南遺跡・小蓮古墳・土佐国分寺跡・比江廃寺跡・高知県立歴史民俗資料館・埋蔵文化財センター

日 時 平成6年7月31日

参加者 30名

「南国市立稲生小学校 埋蔵文化財センター見学」

場 所 (財)高知県文化財団埋蔵文化財センター

日 時 平成6年10月24日

参加者 48名

「大野見村教育委員会 埋蔵文化財センター見学」

場 所 (財)高知県文化財団埋蔵文化財センター

日 時 平成6年12月6日

参加者 8名

● 資料調査等

平成6年10月25日	群馬県埋蔵文化財調査事業団	1名
平成7年1月23日	群馬県埋蔵文化財調査事業団	1名
平成7年3月1日	栃木県文化振興事業団	1名
平成7年3月16日	滋賀県立安土城郭研究所	1名
平成6年3月22日	京都府埋蔵文化財調査研究センター	2名

4. 研修事業他

本年度の研修も奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センターの下記の研修に参加した他、出土遺物調査として県外の調査例等の視察、調査を行った。また、各会議等へ参加し、情報交換を行った。

平成6年度 奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター研修

参加研修名	期 間	参加者
一 般 研 修	平成6年7月5日～8月10日	主任調査員 田上 浩
文 化 財 写 真 課 程	平成6年8月17日～9月13日	調 査 員 曾 我 貴 行
遺 跡 測 量 課 程	平成6年9月20日～10月19日	主任調査員 佐竹 寛

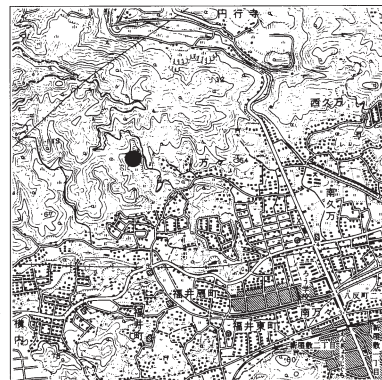
会 議 等 参 加

参加会議等	日 時	参加者
第15回全国埋蔵文化財法人連絡協議会総会(大阪府)	平成6年6月16・17日	原所長・山本調査第1班長 藤方調査員
全国埋蔵文化財法人連絡協議会研修会(栃木県)	平成6年10月6・7日	原所長・明神調査課長 出原調査第3係長・三浦主幹
全国埋蔵文化財法人連絡協議会 中国・四国・九州ブロックコンピュータ会議(香川県)	平成6年9月27日	廣田主任調査員・坂本調査員
第7回四国埋蔵文化財法人実務担当者会議(徳島県)	平成6年7月14・15日	山本調査第1班長・小嶋主任調査員・三浦主幹

IV 発掘調査概要報告

ふくい 福井遺跡 (94-2 KF)

1. 所在地 高知市福井字大谷屋敷1525他
2. 立地 丘陵の先端部・丘陵に挟まれた谷部
3. 時代 縄文時代～中世
4. 調査期間 平成6年4月13日～平成7年3月24日
5. 調査面積 約5,000m²
6. 担当者 坂本憲昭・江戸秀輝



7. 調査内容 福井遺跡は、高知市北部の山地より南方に伸びる丘陵の先端部及び丘陵に挟まれた谷部の標高約30m～40mの部分に位置している。この調査は、四国横断自動車道建設工事に伴う事前の発掘調査ということで、昨年度の試掘調査の結果を基礎資料として、本調査を実施した。

今回の調査では、遺構は弥生時代の竪穴住居跡が3棟、埋納土坑が1基、弥生時代を主とした柱穴、土坑・溝状遺構が多数、谷状地形等が検出されている。遺物は、縄文時代の玦状耳飾り・石斧・石鏃、弥生時代の土器・石包丁・石鏃、古代の須恵器、中世の青磁片が出土している。

まず、縄文時代については、遺構は調査対象区域内では確認できなかったが、出土遺物の中でも玦状耳飾りは、同質の石材を使ったものが本山町の松ノ木遺跡でも出土しており、この時代の両地域の交流の存在がうかがえる。そして、弥生時代については、この調査で最も成果が多かった時期である。遺構の大部分が弥生時代中期後半～後期前半・後期後半のもので、丘陵先端部で確認されている。遺物についても同様で、弥生時代のこの時期のものが丘陵先端部から多く出土しているが、それと、丘陵先端部の南側及び東側に検出された谷状地形の流路のそばの広くない平坦部からも多くの土器・石器が出土している。その中には石包丁等もあり、谷水田も存在していたと考えられるが、調査の中では水田遺構の確認はされなかった。古代については、調査区西側の谷部より須恵器が出土した。ここからは、ほとんど須恵器以外は出土しておらず、周辺の調査区域外にその時期の遺構があり、そこからの遺物と考えられる。中世については、遺構は丘陵先端部に柱穴・土坑を確認したが、わずかであり、遺物は青磁が数点出土している。試掘調査では土師質土器（坏）が土坑から出土している。

今回の調査範囲が丘陵の最先端部ということもあり、縄文時代・古代・中世共に、弥生時代についても、遺構の集中している部分は、丘陵の北側（山側）等へ展開していると考えられる。



竪穴住居跡



埋納土坑

具同中山遺跡群 (94-1 GN)

1. 所在地 中村市具同字中山
2. 立地 中筋川左岸の沖積地
3. 時代 縄文時代～鎌倉時代
4. 調査期間 平成6年4月20日～平成7年2月21日
5. 調査面積 5,527m²
6. 担当者 伊藤強・松田直則・山崎正明



7. 調査内容 具同中山遺跡群は、四万十川の支流中筋川左岸の沖積地に立地する。中筋川流域には、縄文時代から中世にかけての遺跡が多く所在している。当遺跡は、後川流域の古津賀遺跡とともに、河の神を祭る祭祀遺跡として、全国的にも注目を集めてきた。本年度調査では、中村宿毛道路予定地の森沢橋東岸にある調査区をⅠ区（西側）、Ⅱ区（東側）に分けて調査を行った。Ⅰ区においては弥生時代から中世に至る四時期の自然流路を確認、また古墳時代の流路の岸で鉄剣を祭った祭祀跡を確認した。Ⅱ区では主に、縄文時代晩期から弥生時代前期の遺物が中心であった。以下各時代ごとにその概要を紹介する。

縄文・弥生時代については、まずⅠ区の流路(SR4)より弥生中期後半の土器、農耕用の鍬などが出土したが点数は約70点と少なかった。これはSR4の北側肩部分が調査区外に出ており、わずかに長さ30mの部分しか確認できなかったことによる。しかし、鍬の完形に近い製品が中期後半の土器と共に出土しており、これは貴重な資料である。Ⅱ区においては、まず遺構として、Ⅷ区層上面に9基のピットが検出された。幅16cm～22cmの円形プランを有し、深さは13cm～27cmと比較的小規模なものばかりであった。いずれのピットも炭化物を多く含んでいたが、その性格は不明である。遺物では石包丁、管玉が各1点、そして、縄文晩期末に位置付けられる入田B式土器、弥生前期末の大篠式土器が出土している。大篠式土器は、多条沈線や微隆起帯等が施され、文様構成上で豊富なバリエーションを持っている。また、瀬戸内系の逆L字口縁を有する土器が搬入されており、これらは県西部の弥生社会を検討する上で有効な資料となろう。

古墳時代以降の遺物、遺構はⅠ区のみで確認された。流路(SR3)は、長さ約60m、幅は平均7mの部分を確認した。肩部分は平安時代の流路(SR2)とほぼ同じレベルで検出している。遺物はこの時期のものが最も多く、Ⅰ・Ⅱ区全遺物の45%を占め、出土地点は流路内埋土と流路の岸にあたる自然堤防上に分かれる。流路から出土した土器は、土師器では高坏が多く、その他に甕、鉢等であり、須恵器では甕、坏、壺等であった。土師器の高坏は、坏部下半に稜を有し、柱状部は下方に広がりを見せ、裾部は屈曲して水平に近く開くタイプのものが多く、5世紀の後半代のものと思われる。須恵器の坏身は、立ち上が



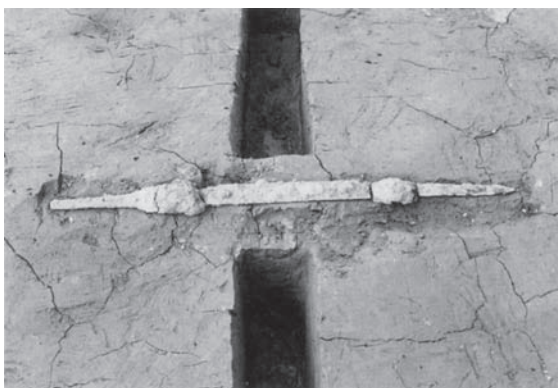
調査区全景

りが内傾し、その高さは器高の1/3以上であり、底部は丸みを有するもので、5世紀後半より6世紀初頭の時期が考えられる。また、流路の岸にあたる部分で、祭祀遺物の集中地点を確認した。鉄剣、石製の勾玉、白玉、手捏の土器などが出土している。流路内の高坏の多さと併せて考えてみても、中筋川の岸において、小規模ではあるが、祭祀的行為を行っていた跡だろうと考えられる。そして、土器の多くは川に廃棄されたものであろう。鉄剣は流路の肩部分で単独に出土しており、その周囲には若干の須恵器、土師器片が認められるのみである。祭祀的行為に使用されて現位置に置かれたものと考えられる。模造品ではなく、鉄剣そのものを祭祀に利用している例は、県内でも初例である。その他にも、木製品では、織物道具や、木刀、農耕用の鋤など、鉄製品では鍬などが、流路内より出土していることから、自然堤防上で行われた祭祀の内容を考えていくことができる。また、獣骨（猪、狸等）や木の実、自然木なども出土しており、今後、古環境の復元を進めていく上で、人工遺物にだけでなく、自然遺物にも着目することが重要となっていくであろう。そして、同規模の祭祀遺跡は、中筋川の自然堤防上に広がっていくものと考えられる。

平安時代の流路(SR2)は幅8mであり、確認された長さは60m、流路中央部から南への支流を持っている。また、流路に対して斜め方向に延びる杭列を確認したが、性格は不明であった。遺物は少なくなり、土師器、須恵器など約250点が出土している。木製品なども出土しているが、明確な製品は数少ない。獣骨も細片が多い。この流路は、昨年度の船戸遺跡で検出された古代の溝とほぼ同時期のものであろう。

鎌倉時代の流路(SR1)は幅4m、長さ80mの部分が確認された。深さは最深部で約1.5mであった。遺物としては瓦器、土師器、獣骨、木製品など約450点が出土した。瓦器は、畿内産の楠葉型、和泉型の製品で流路の時期を限定できる。獣骨は馬や牛の頭骨なども存在した。これらは農作業、運搬等に使われ、遺骸が流路に廃棄されたものと考えられる。

以上のように、今回の調査では生活の痕跡が縄文時代晩期まで遡ることが確認された。さらに船戸遺跡との関連では、古墳時代から鎌倉時代までの流路はI区の流路とほぼ同時期であり、今後古環境の復元を進めていく上で貴重な資料を提供することができた。



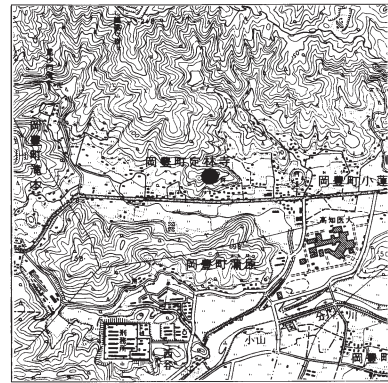
鉄剣出土状況



大篠式土器の破片、甕

長畝3号墳 (94-3 NN)

1. 所在地 南国市岡豊町定林寺字長畝
2. 立地 尾根上 (標高約62m)
3. 時代 弥生・古墳時代
4. 調査期間 平成6年6月6日～12月13日
5. 調査面積 1,600㎡
6. 担当者 廣田佳久・池澤俊幸



7. 調査内容 本古墳は、長畝3号墳として発掘調査された古墳であるが、調査の結果3時期の異なる主体部が確認され、それぞれに独自の墳形が考慮されている。古墳が発見されたのは、平成元年度に行われた四国横断自動車道(南国～伊野)の建設工事に伴う事前の分布調査の際であり、発見当時の地形が前方後円墳形を呈していたことから県内2基目、高知平野では最初の方後円墳ではないかと見る向きもあった。

古墳は、県内で古墳が最も集中する県の中央部、高知平野の北側の尾根上に位置し、眼下には高知平野さらには太平洋を望むことができる。また、古墳は芝の前1～3墳、野津古古墳、長畝1号墳で構成された定林寺古墳群の中に含まれ、周辺には県内最大の古墳群である舟岩古墳群(21基で構成)、県内最大級の円墳である小蓮古墳(径22～28m、高さ7m)、蒲原山古墳群、滝本古墳群などが所在する。

調査は、まず、平成5年度に地下レーダー探査及び試掘調査が実施された。地下レーダー探査によって土坑状の落ち込みが数カ所で認められ、それを受けた試掘調査では古墳の主体部ではないかとみられる遺構が検出され、鉄剣2(長さ約69cmと約60cm)、鉄鏃8(柳葉鏃5、三角形鏃2、圭頭鏃1)、鉄製鎌1、鉄製鋤先1、袋状鉄斧1などが出土した。なお、鉄剣は床面直上、鉄斧は埋土中位から出土したとのことであった。この結果を受けて平成6年度に本調査を実施することとなった。

事前の試掘調査の結果から前期古墳1基(長畝3号墳)が存在するのではないかとみられていたが、本年度の調査の結果、弥生時代から古墳時代後期にかけての複数の埋葬施設が確認され、大きく4時期の変遷を辿ることが判明した。

まず、標高の最も高い部分に弥生時代終末とみられる土坑墓群が形成される。遺物が出土していないため明確ではないが、隣接する北側の尾根上に立地する奥谷南遺跡から発見された弥生時代後半の石室墓に続くものとみられる。この土坑墓は4基で構成されており、規模は1号土坑墓が長さ1.80m、幅0.72m、深さ11cm、2号土坑墓が長さ2.35m、幅1.00m、深さ28cm、3号土坑墓が長さ2.05m、幅1.04m、深さ34cm、4号土坑墓が長さ1.42m、幅0.60m、深さ12cmであり、全般に削平の影響がみられ残存状況は良くなく、また、主軸方向は区々であった。次に試掘調査の際発見された主体部がやや東よりに造られる。この主体部は長さ3.00m、幅1.15m、深さ0.95mを測り、床面は割石を敷く礫床となっており、断面がU字形を呈していることから割竹形木棺を使用していたのではないかと推測される。今回の調査で出土した遺物は上層からの土師器片(布留の古段階併行)と床面北側からの形状不明の鉄の細片のみであったが、試掘調査の際出土した前述の遺物から

古墳時代前期初頭に位置付けられるのではないかとみられ、宿毛市高岡山1号墳より古い県内最古の古墳と考えられる。また、この北隣には直交する形で粘土床の主体部（長さ2.48m、幅0.70m、深さ0.43m）が造られる。遺物が出土していないため明確な時期は不明であるが、両小口に割石を据えていることから礫床の主体部と同じ造りとみられ、時期的に大きな隔たりはなく同一墳丘上に造られたのではないかと考えられる。3番目の時期が小竪穴式石室（長さ1.23m、幅0.72m、残存高45cmで、墓坑は長さ2.50m、幅1.48m）が築かれる時期で、丁度礫床の主体部の東側を切って築かれていた。県内初の竪穴式石室である。石室はチャートの塊石を段積みし、3段分が残存していたが、表土直下で検出されたため天井石は欠失していた。床面は小さな河原石を敷いた礫床となっており、鉄鏃2（三角形鏃）が副葬されていた。また、掘方から土師器片が出土している。時期的には須恵器が副葬されていないことからみて5世紀中頃ではないかと考えられる。最後の時期は竪穴系横口式石室が築かれた時期で、丁度前方部ではないかと考えられていた部分に築造されていた。盛土が約30cmほど残存しており、部分的に周溝も検出され、さらに西側では墓前祭祀に関連するとみられる不整形の土坑と柱穴2個が確認された。ただし、この不整形土坑は玄室に対して斜め方向を向く。石室は右片袖式で、玄室は長さ2.75m、幅1.35m、残存高80cmを測り、羨道は長さ1.40m、幅1.45m、残存高50cmで、側壁の一部が残存していた。石室は竪穴式石室と同じチャートの塊石を使用し、奥壁は2枚の石を立て、側壁と玄門部は横に据え、側壁は5段分が残存し穹隆状を呈していた。副葬品として須恵器（有蓋高杯5、長頸壺3、短頸壺3、広口壺3）、土師器片1、装飾品（管玉、ガラス小玉、算盤玉、土玉、銀環）、鉄製鋤先、馬具、鉄鏃等がみられた。時期的には6世紀前半と考えられる。なお、墓前祭祀に関連するとみられる不整形の土坑からは6世紀後半から7世紀初頭にかけての須恵器が出土しており、古墳が築造されてから少なくとも半世紀に亘って墓前祭祀が行われたものとみられる。

当初、各埋葬施設に伴う明確な外部施設が認められないことから現況で認められる前方後円墳を踏襲した上での変遷を考えたが、竪穴系横口式石室に伴う周溝が確認されたことで、それぞれ単独の墳丘を持つ古墳との見方ができるようになり、弥生時代の土坑墓群（墳丘墓の可能性も考慮される）と3基の古墳（長畝2号墳は存在しなかったため、実際は長畝2～4号墳となる）と捉えることが可能となった。その際の墳形は竪穴系横口式石室と小竪穴式石室が円墳（それぞれ径約10m）で、残存地形が前方後円墳形を留めていることから礫床の主体部が前方後円墳（全長約41m）であ



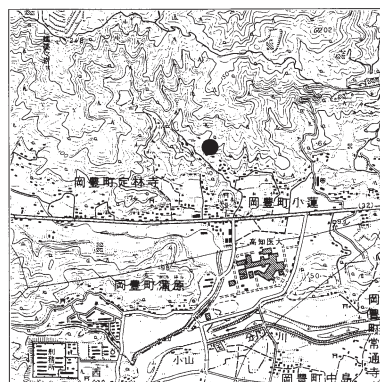
遺跡全景

った可能性も考えられる。ただ、礫床の主体部の設置位置が後円部と考えられる部分の中央ではなく東に寄っていることからすると円墳であった可能性も考慮する必要がある。

現況では開墾による削平の影響が著しく、墳形等を決するには十分な資料が残存せず、いくつかの課題を残すことになったが、今後の発掘調査の成果を待って再検討を加えてみたい。

奥谷南遺跡 (94-4 NOM)

1. 所在地 南国市岡豊町小蓮 奥谷
2. 立地 南東に開く谷及びその両側の尾根上
3. 時代 縄文時代～近世
4. 調査期間 平成6年4月18日～9月24日
平成6年10月17日～平成7年3月15日
5. 調査面積 5,400m²
6. 担当者 松村信博・小嶋博満・池澤俊幸



7. 調査内容 奥谷南遺跡は、南東に開いた谷とその両側の尾根上に展開する縄文時代から近世にかけての遺跡である。当遺跡は、昭和63年に縄文時代の石斧が見つかったことから、100m程北側に位置する奥谷北遺跡とともに縄文時代の遺物散布地として知られていた。

この遺跡が四国横断自動車道建設予定地になったことに伴い、平成5年度に試掘調査を行った。その結果、縄文～近世の各時期の遺物・遺構が確認され、それを受けて平成6年度に本調査を実施し多くの貴重な成果が得られた。調査面積は5,400m²だが、調査対象地は約3万m²と広く、また立地条件やそれぞれの地点における遺跡の性格も大きく異なるため、I～VIの調査区ごとに調査を進めた。主な成果は大きく4つに分けることができる。時代順に縄文時代の集落の一部（堅果類の貯蔵穴）・弥生時代の集落（高地性集落）・弥生時代末の集団墓・17世紀中頃の儒墓の4つである。以下、この4つの項目に分けて遺跡の概要について述べる。

縄文時代の遺物・遺構は谷の北岸一帯に分布しており、遺物はピット・土杭などの遺構周辺や旧谷地形の低い部分からまとまって出土している。出土した土器はその多くが縄文中期末（北白川C式併行）のものである。高知県の縄文中期末は遺跡数・出土遺物量ともに極端に少なく（10数遺跡が知られているにすぎない）、その実態が不明な部分も多い。土器以外にも石鏃・石斧・叩き石・石錘など石器類も出土しており、縄文中期末の生業を知るための貴重な資料が得られた。

縄文時代で特筆すべきは堅果類の貯蔵穴が確認されたことである。旧谷地形の低地部、常に水が湧き出す地点にあり、中期末の包含層除去後に検出した。貯蔵穴は全部で7基、アカガシ・アラカシ・クヌギ・シイ等堅果の種類により穴の形態が異なっており、深さ20～60cm、直径70～100cm、穴の中には径10～40cm大の礫や植物の葉・砂などが層を成して堅果類とともに詰め込まれており、当時の食料保存の知恵の一端を窺い知ることができる。

また2点だけだが縄文前期初頭の土器（羽島下層式併行）も出土しており、少なくとも約6,000年前には当遺跡周辺に人々の足跡が記されていたことがわかった。

この谷の東尾根上、斜面一帯（標高45～60m）に弥生時代中期末の集落を確認した。竪穴住居



縄文土器出土状況

跡が4棟、段状遺構と呼ばれる堀立柱を持つ建物跡が4棟、調査区の関係上一部のみの調査のため断定はできないが住居跡の可能性が高い遺構が3棟、計11棟もの建物跡が検出されている。建物間での拡張の痕跡、斜面での建物の密度などから、一時期に5～6棟の建物の存在が予想される。遺構から出土する土器は弥生中期末を中心とした時期で、この集落は弥生中期末～後期初頭にかけて機能した高地性集落と考えられる。高知県内の高地性集落は他に20数ヵ所確認されており、弥生中期中様以降に出現し後期初頭まで残り、その後姿を消してしまう。これらの集落は高知平野を境にして東西でその様相が全く異なっており、東部は凹線文土器の割合が高く、西部は在地色の強い土器群が優勢で凹線文土器はほとんどないという特徴を持つ。奥谷南遺跡は凹線文土器の割合が50%以上と高く、東部同様、瀬戸内の影響を強く受けた遺跡であるといえよう。

谷の西側尾根頂部付近（標高56～58m）には、6基の土坑墓と1基の土器棺墓が造られている。土坑墓から出土している土器はすべて南四国の弥生後期末のヒビノキⅡ式土器である。土坑墓はその方向から2つの墓群に分けられるが、墓群間の時期差をみてとることはできない。周辺の平野を見下ろす位置に立地していること、そして各土坑墓に約20～200個の礫を伴うことから、一般の集落成員とは異なる集落の中心となるグループを葬った「集団墓」だと考えられる。土坑墓の中で一基は、土坑の周囲に砂岩・チャート・石灰を詰めて石室を意識した造りとなっており、「竪穴式石室墓」の範疇で捉えられるものである。他地方の例と比較すると粗雑な造りではあるが、その影響下にある墓制だと考えられ注目される。今回の集団墓の調査により、調査例の少ない南四国の弥生終末の墓制を解明する上で貴重な資料が得られた。

谷東側尾根頂部付近からは、17世紀中頃の儒墓が確認された。儒墓とは儒教の教えに則って造られた墓で、土佐では17世紀中頃盛んにつくられている。儒墓は一辺2.6mの方形の土坑墓で、2段掘りになっており、地表から1.5m下から一辺1m深さの50cmの穴が掘られている。この穴の中に唐津焼の甕（中型甕）が鉢（二彩唐津）で蓋をされた状態で横倒しになって埋められていた。甕には人骨が付着しており、鑑定の結果、土葬で乳児の骨であるということが判った。昭和63年、今回の調査地点から数m北で石盤に刻まれた墓誌が見つかった。墓誌の中に、承応元年（1652年）9月1日に誕生し9月5日に亡くなった乳児についての記載がある。甕に付着した人骨はこの乳児のものと推定され、儒墓は土葬であるということが裏付けられる結果となった。遺物も17世紀前半のものであり、墓誌の年号と一致する。儒墓の調査は全国的にも珍しく、墓の構造を知る上でも貴重な調査となった。



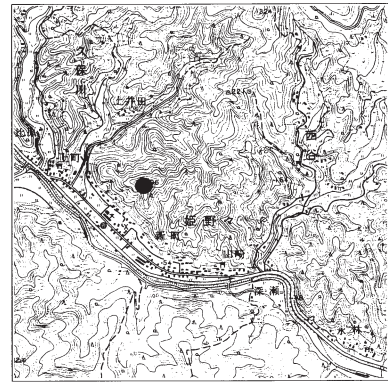
弥生中期末 住居跡



弥生後期末 竪穴式石室墓

ひめのの
姫野々城跡 (94-9 HH)

1. 所在地 高岡郡葉山村姫野々886-1他
2. 立地 新莊川北部山地より派生する丘陵上
3. 時代 南北朝～戦国時代
4. 調査期間 平成6年5月18日～7月20日
5. 調査面積 200m²
6. 担当者 吉成承三



7. 調査内容 姫野々城跡は、土佐を代表する七守護、いわゆる七人の在地有力国人の一人である津野氏の居城であり、姫野々の集落の北側にそびえる標高193mの山上に立地する。山麓には津野氏土居跡があり、山麓から山頂部までの比高差は132mと大きく南北朝期の山城の様相を呈する。

現状での縄張りを見れば、山頂部には東西23m、南北最大幅8.9mを測る平面楕円形を呈した「詰ノ段」にあたる平坦面が存在する。詰ノ段から比高差3～5mを測る下方には、腰曲輪を呈した「二ノ段」があり、この二ノ段は、西から詰ノ段北下、東下を周り、詰ノ段南下まで延び、西側から螺旋状に高くなっている。二ノ段南及び二ノ段西は、それぞれ最大幅11.2m、16.5mを測る腰曲輪の中でも他に比べ広い平場が存在する。これらの主郭部分には土塁等の囲みは見られない。二ノ段の7～10m下には畝状堅堀群があり南東斜面には6本、北斜面には9本、南西斜面に5本みられ、合計20本の畝状堅堀で主郭をとり囲むように放射状に構築されている。これら主郭部分にあたる山頂部から西、東、南に延びる尾根にはそれぞれ連続して堀切があり、中でも南に延びる尾根上には、最大幅6.9m、底部幅1.3m、深さ2.6mを測る姫野々城跡の中でも最大規模の堀切がある。

今回の調査は、公園整備計画予定ルート部分である主郭部分及び丘陵南尾根部分を中心に試掘トレンチを設定し確認調査を実施した。その結果、詰ノ段においては約20m²ほどの曲輪の拡張がみられ、この拡張部分からPitが検出された。また、礎石に使われていたと思われる扁平な円礫も同一面で検出されている。詰ノ段からの出土遺物は、曲輪の拡張部分において土師質土器を中心とするものであり、詰ノ段東部分においては表土層から輸入陶磁器の染付が集中して出土している。二ノ段腰曲輪の東部分では、全長10.8m、上端幅1.8～2.4m、底幅50～60cm、深さ1.14～1.42mを測る平面三日月状を呈した堀状遺構を検出した。この堀状遺構は地山の岩盤を掘り込んで構築されており、側面の一部には直径50cm大の自然石を石垣状に積み上げた箇所がみられる。堀状遺構の埋土



二ノ段西 礎石遺構

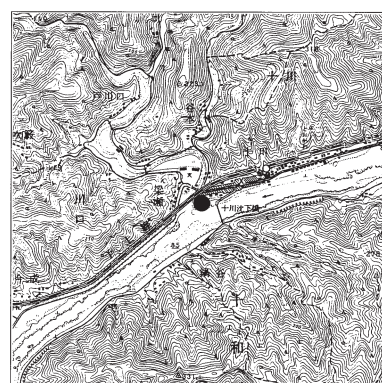


二ノ段東 堀状遺構

からは、多量の供膳具である土師質土器の小皿・皿・杯がほぼ完形で出土した。また、埋土である黒色土（炭化物含む）からはこれらの土師質土器と共に煮沸具である瓦質土器の羽釜（河内産15C前半代）、調理具では備前焼（15C後半代）の播鉢・甕も出土している。二ノ段西，東部分においては性格・規模等是不明であるが礎石機構を検出しており、遺構に伴う土師質土器も多量に出土した。その他の出土遺物をみれば輸入陶磁器の青磁（13C～15C）・青白磁（13C後半代）・白磁（13C～14C）等が量的に比較的多く出土しており注目される。県下の山城調査では城郭内における出土遺物の量は極めて少なく、今回の調査のように主郭部分を中心に多量の遺物が出土したことは、城郭内における各曲輪の性格、さらには小地域における特殊性を追求していくうえで貴重である。

とうかわだ ばさき
十川駄場崎遺跡 (94-10 TD 6)

1. 所在地 幡多郡十和村十川
2. 立地 四万十川中流右岸低位段丘縁部
3. 時代 縄文時代
4. 調査期間 平成6年6月7日～8月5日
5. 調査面積 約30m²
6. 担当者 前田光雄



7. 調査内容 十川駄場崎遺跡はかつて4回の発掘調査が実施され、昭和63年の調査では新たに縄文時代草創期に含まれる隆起線文土器、石槍等が出土していることから、平成5、6年に発掘調査、平成7年に整理作業の計3ヶ年計画で学術調査を実施することにした。目的は十川駄場崎遺跡の内容把握、範囲確認で今後の保存活用を目的とする学術調査である。

本年度は昨年度に引き続き、198号線沿いに8×4mのトレンチを設け、調査を実施し、昨年度の調査区に較べやや平坦なもの、深さ2～3mにもおよび石器、土器が出土した。石器は石鏃が大部分を占め、石器を作る際の剥片が多量に出土している。

また平成5年度の整理作業も実施し、剥片類は互いに接合するものが多く、原形の石にまで復元可能な資料を数多く得ることができた。これらの接合した資料により、縄文時代の剥片剥離技法の一過程を復元できそうである。土器は縄文時代早期に含まれる条痕文土器が多く出土している。土器が脆く、全体の形を復元できるものはなく、早期に含まれる土器としては高知県下では最も多い。その他に四万十川に面した南岸部のトレンチからは縄文後期の土器が出土し注目される。



調査区

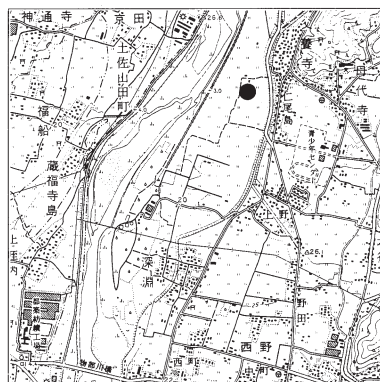


遺物出土状態

ふかぶちきた

深淵北遺跡 (94-5 FK)

1. 所在地 香美郡野市町父養寺
2. 立地 河岸段丘上
3. 時代 奈良時代後半～平安時代
4. 調査期間 平成6年9月13日～12月6日
5. 調査面積 約1,800m²
6. 担当者 佐竹寛・吉成承三



7. 調査内容 深淵北遺跡は、物部川の東岸に位置しており、付近には田村遺跡群をはじめ、古物部川の沖積平野や河岸段丘上に数多くの遺跡群が立地している。今回の調査は、野市町西部地区県営圃場整備事業に伴うものであり、平成元年にも試掘調査が行われ、官衛関連の遺物が広範囲にわたって確認されていた場所である。

本調査を実施するにあたって、事前に40ヶ所の任意トレンチを設定して試掘調査を実施した結果、遺構を検出できたのは1ヶ所のみであった。このトレンチでは、表土下約20cmの所で暗褐色粘質土の遺物包含層を確認し、10世紀代を中心とする土師器、緑釉陶器、須恵器等が出土している。この包含層は北部で厚く、南に向かうほど薄くなっており、中央部は流路による影響で切られている。他のトレンチについては、ほとんどが流路の影響による礫層及びシルト層で、弱干の遺物を含んでいたが、少量の細片であり、流路による流れ込み遺物と考えられる。このため、遺構を検出した北部を中心に調査区を拡張し、本調査を実施した。

本調査で検出された遺構はピット164個、土坑3基、溝17条、性格不明遺構4基である。なかでも、一括性の高い遺構としてSD12・13をあげることができ、12世紀代のものとみられる土師器の椀・皿・須恵器の甕等が出土している。また、SD12に沿うように建物跡とみられる柱穴群も検出された。この他にも包含層より緑釉陶器、黒色土器や楠葉型の瓦器椀、白磁等も出土しており、当時の土佐への流通経路および搬入時期等を知る上で貴重な資料を得ることができた。また、在地で生産されたとみられる須恵器も出土しており、当遺跡周辺に立地する古窯との関係、さらには土師器生産にあたっての須恵器工人の動向を知る上でも貴重なものである。

このように、全般的に畿内文化とのつながりをもつ官衛関連の出土遺物が多く、南隣の深淵遺跡や周辺の官衛関連の遺跡を含めて香美郡衙推定区域全体のより詳細な性格・範囲及び時期等を把握するための貴重な資料を得ることができた。



SD12・13遺物出土状況

ながた
永田遺跡 (94-11 MN)

1. 所在地 長岡郡本山町本山字永田
2. 立地 吉野川上流域右岸の河岸段丘上
3. 時代 縄文・弥生・鎌倉・室町・江戸時代
4. 調査期間 平成6年6月14日～6月24日
5. 調査面積 400m²
6. 担当者 出原恵三・佐竹寛・藤方正治



7. 調査内容 調査区は嶺北高校敷地に隣接して存在し、遺構は南へ緩やかに下降するシルト層を基底面として比較的残り良く検出された。確認された主な遺構は上記各時代の土壇墓や土坑であり、他に住居跡や柱穴群も存在する。

縄文時代の遺物である深鉢口縁部は晩期のものであり、口縁下に刻目突帯を有している。弥生中期末の土壇 (SK11) は1.6m×0.6mの長楕円形を呈するものであり、出土遺物は甕・高坏・結晶片岩製とサヌカイト製の打製石包丁などである。弥生後期中葉の土坑 (SK32) は1.17m×1.07mの楕円形を呈しており、深さ1.25mを測るものである。ここからは壺・甕・鉢・高坏・蓋が自然礫と共に出土しており、一時期に投棄されたと考えられる可成一括性の高い土器群である。古墳時代初頭に廃絶された竪穴住居跡が2棟検出されており、このうち1棟 (ST1) は残存規模6.8m×6.4mの隅丸方形又は多角形を呈するものである。北部は良く残存されており、壁際から幅1.0～1.2mのベッド部が存在する。また、このベッド部下からは先行する時期に機能していたと考えられる小溝が検出されている。出土遺物は甕・鉢・壺などであるが、この中には庄内式甕口縁や弥生後期初頭の瀬戸内系長頸壺胴部が含まれている。遺物と共に炭化木材片が多く検出されており、火災又は焼却された住居と考えられる。中・近世の遺物には、唐津溝縁皿片 (SK12)・瀬戸片口おろし皿 (SK23)・白磁碗 (P5)・伊万里染付碗 (P24)・伊万里染付小坏 (P25)・瀬戸天目茶碗 (P31)も見られる。これらの遺物が出土した土坑の多くは円形・楕円形・不整円形を呈するものであり、平らな床面を持つものが多い。土坑の中には中央に結晶片岩の礫を積み上げたものや断面が台形を成すものも存在している。

四国中央部に位置するこの遺跡域での生活が、周辺の地域とどの様に関わって来たのか知る手掛かりの一つとも成るものと考えられる。



SK32出土状況



ST2 (手前) と中近世土坑・柱穴群

こごめ

小籠遺跡 (94-14 RNK)

1. 所在地 南国市岡豊町小籠469他
2. 立地 更新世形成の扇状地の先端部
3. 時代 弥生・古墳・室町・江戸時代
4. 調査期間 平成6年7月27日～12月24日
5. 調査面積 8,506㎡
6. 担当者 出原恵三・泉幸代・藤方正治



7. 調査内容 今回の調査は高知市から土佐山田町に至る幹線道路（あけぼの道路）建設工事に伴うものである。あけぼの道路の建設計画域は更新世における最終氷期に形成された長岡台地上で、小籠遺跡は標高6～7mに立地している。これまで長岡台地における発掘調査例は多いが台地の中部や東部に限られており西部での調査は今回が初めての試みである。

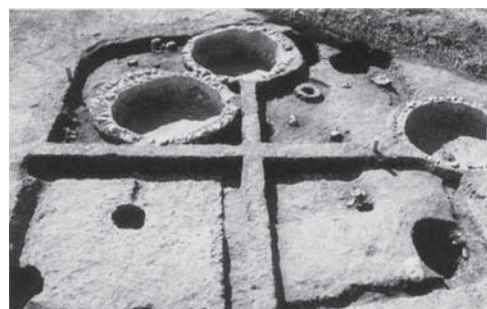
今次調査で注目すべきことの一つとして弥生時代前期末の溝が上げられる。この溝は幅1.8～2.4m、深さ1.2m、確認延長30mで調査区を南北に走る大溝である。これまで県下で確認した前期の溝の中では最大規模を有する。遺物は弥生時代前期末と後期末土器が多量に出土している。この溝は前期末以前に掘削され、底浚えを繰り返しながら利用した灌漑用の水路と考えられる。これは長岡台地の開発が前期末（紀元前2世紀）に始まることを示唆するものであり、長岡台地の開発史に再検討を迫るものである。



弥生時代前期の溝

大溝の他に確認された遺構は竪穴住居跡、ピット、多数の溝、近世墓、井戸、洗い場、産業用と思われる土坑など多種多様である。

住居跡は調査区の西半分が多く、8棟の竪穴住居を検出した。内4棟が弥生時代後期中葉に属し、他4棟が後期末に属する。平面形が方形住居4棟の内2棟は床面の一部を高くしたベッド状遺構を設けている。これら後期中葉の住居跡から完形品を含む多量の土器が出土している。後期中葉に属する一括資料が乏しい本県にとっては



竪穴住居跡と産業用土坑

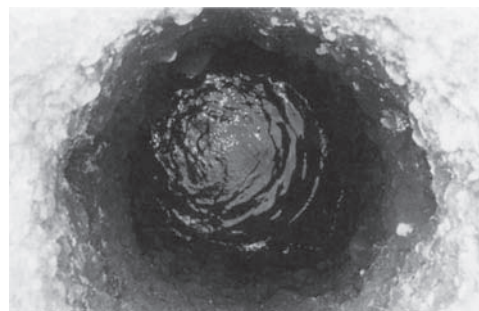
土器編年や組成を知る上で貴重な資料となる。後期末の住居跡には壁辺に完形の鉢3個と高坏1個が伏臥の形で置かれ、内2個は重ねられていた。住居を放棄する際の祭祀行為とも解釈できる。

溝はI区の西半分やIV区で多数検出した。基本的に南北か東西に走っており、殆ど東西方向の溝が南北方向の溝に切られている。東西方向の溝が古いと言えるが遺物が少ないため詳しい時期は明らかにはできない。ただ調査区を逆L字状に走る溝（総延長80.8m）からは土師器の坏や青磁碗が出土していることから15世紀に比定することができよう。性格については屋敷地を囲む溝の可能性もあるが、内側に建物痕跡が認められない。

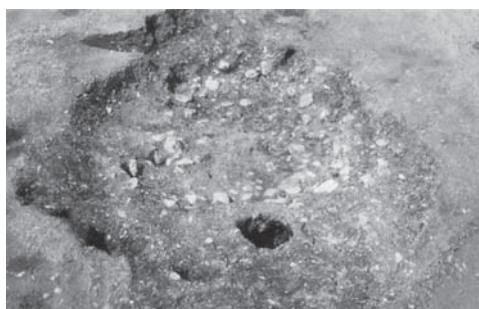
I区の北東から近世屋敷跡と思われるピット（掘立柱に伴うピット）群が検出され、数次に度る建て替えが行われたと考えられる。その付近に素掘りの井戸と近接する洗い場遺構を検出した。井戸は直径1.2m、深さ2.5m前後で、河原石出土辺りから湧き水が認められた。埋土下層より伊万里碗や近世陶器碗が出土している。洗い場遺構は段状に掘られており、床面には拳大から人頭大の円礫を敷き詰めていた。この遺構からも18世紀の陶磁片が出土しており、同時に機能していたことを示している。今まで井戸を取り込んだ屋敷跡は県下でも知られているが、洗い場遺構を伴った例は今次調査が初めてである。当該期の生活史を知る上で貴重な資料となろう。

また、中央部や西部で多数の近世墓を検出した。早桶タイプの座棺や長方形の木棺の寝棺などの数基から、骨細片と共に歯や六道銭、近世陶磁器片が出土した。六道銭は死人を葬るときに棺に入れる六文の銭で、俗に三途の川の渡し賃だと言われているがI・II区では1基から2～5枚の出土で、III区は9枚付着で出土しており、6枚セットは確認できていない。III区の3枚は鉄銭で他は皆銅銭である。鉄銭は錆化が激しく判読不可能であるが、銭種は三種（永楽通宝、治平元宝、寛永通宝）確認でき、寛永通宝が一番多く、古寛永1枚、文銭4枚、新寛永9枚と分類できた。六道銭の組み合わせから墓の埋納年代を18世紀初頭から末頃に推定することができる。

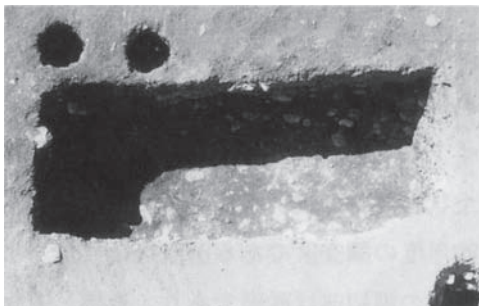
近世墓の他に注目されたのは産業用と考えられる土坑が多かったことである。その多くが直径1.5m前後の円形で周囲を厚さ5～7cmの三和土^{ほんだ}で固めてあった。他に隅丸方形や小さい楕円形の土坑があり、外縁の周囲には石列があるものとなないものがあつた。上部は削平されている可能性があるが検出面からの深さは25～50cmであり、並んで近くにあつたり、住居跡（弥生時代後期末）の中に造られた土坑もある。付近に井戸がたくさんあることから、水に関わる（例えば染色など）近世の産業土坑と考えられる。



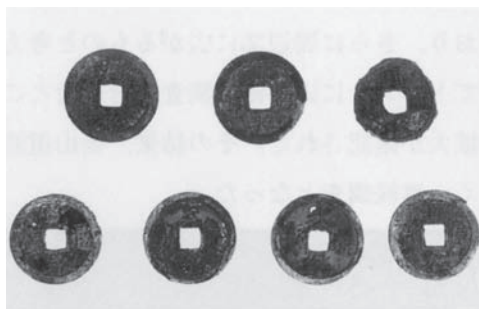
素掘りの井戸



洗い場



近世墓（木棺の寝棺）



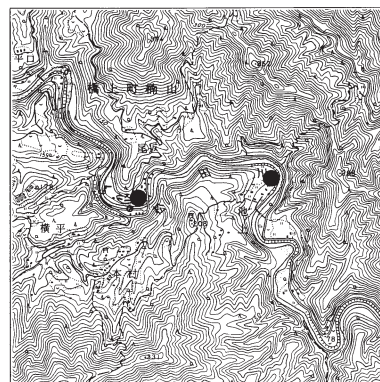
六道銭（寛永通宝・永楽通宝）



産業用土坑

いけ うえ くすやま
池ノ上・楠山遺跡 (93-12 SI・SK)

1. 所在地 宿毛市橋上町楠山
2. 立地 松田川上流段丘上
3. 時代 縄文時代
4. 調査期間 平成6年7月13日～10月7日
5. 調査面積 1,270m²
6. 担当者 松田知彦(高知県教育委員会)・森田尚宏



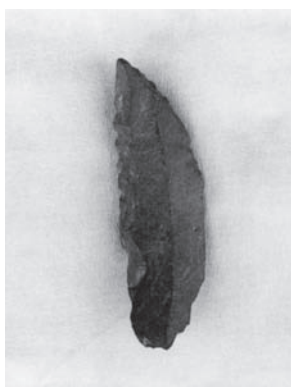
7. 調査内容 池ノ上・楠山遺跡は、宿毛湾に流入する松田川の上流域の河岸段丘上に位置しており、池ノ上遺跡は右岸、その上流約2kmの左岸に楠山遺跡存在する。両遺跡は坂本ダム建設に伴う発掘調査であるが、平成5年度に試掘調査が行われ、池ノ上・楠山両遺跡ともに縄文時代早期の押型文土器とともに石鏃・スクレーパー・剥片・石核等を出土し、池ノ上遺跡ではさらに断面三角形の分厚い尖頭器も出土している。

本年度の調査は、池ノ上遺跡を先行して実施されたが、その結果、楠山遺跡は範囲の拡大もあって、全掘には及ばなかった。池ノ上遺跡では、昨年度の調査区を拡張した部分以外に、川よりの下段部分を対象としたが、この調査区からは原位置をある程度保っていると考えられる剥片・石核・石鏃・スクレーパーが出土している。また、剥片には横長剥片がみられ、さらに頁岩製の国府型ナイフ形石器が1点出土しており、旧石器時代の遺物として注目される。しかし、ナイフ形石器の出土状態はやや攪乱にかかっており、明確ではない。遺跡の遺存状態としてはあまり良好とは言えず、昨年度の調査区である上段部は後世の攪乱によりごく一部を残すのみであり、下段部においても調査区の周辺部は砂層であり、遺構・遺物は残されていなかった。

楠山遺跡においても昨年度の調査区を拡張したが、やはり剥片・石核を中心に石鏃等を出土しており、さらに周辺部に広がるものと考えられる。また、昨年度に着手できなかった山側部分についてトレンチにより確認調査を行ったところ、地表下約1mから剥片類の出土があり、遺跡の範囲の拡大が確認された。その結果、楠山遺跡については、平成7年度に遺跡全域について調査を行うべく、継続調査となった。



池ノ上遺跡 下段調査区



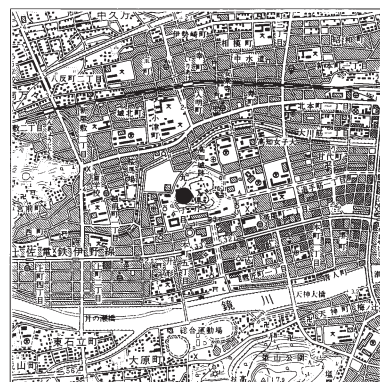
ナイフ形石器



スクレーパー

こうち でんみだいどころやしき
高知城跡 伝御台所屋敷跡 (94-13 KC)

1. 所在地 高知市丸の内
2. 立地 独立丘陵
3. 時代 中世～近世
4. 調査期間 平成6年7月5日～9月12日
5. 調査面積 930㎡
6. 担当者 曾我貴行・寺川嗣・宮地早苗



7. 調査内容 高知城跡は高知市の中心部、大高坂山にある。大高坂山は南北朝時代には大高坂松王丸ら大高坂氏居城の大高坂城として利用され、また天正16(1588)年には長宗我部元親が岡豊城より居城を移し城下町の建設を試みている。近世では、関ヶ原合戦後入国した山内一豊によって高知城が築城される。城跡は現在、国の史跡・重要文化財に指定されている。調査は平成5年度に引き続き、高知市立動物園跡地対象の史跡整備に伴う発掘調査である。調査前の現状は高低差3～4mの段差を有する2ヵ所の平坦地形から構成されていた。調査はこの上下段にわたっておこなった。

調査の結果、遺構は上下段で検出でき、その数300基に及ぶ。その中には中世の遺物(15～16世紀)を伴ったピット状遺構が確認された。柱穴の大きさは残りのよいもので直径が20～30cm程、深さは80cm以上あった。建物の復元には至っていないが、高知城以前の長宗我部氏関連の遺構である可能性が高い。近世のものとしては17世紀初頭に位置付けられる土坑状遺構3基、ピット状遺構、溝状遺構、礎石、石列を検出した。



ピット状遺構完掘状況(東より)

遺物は調査区全体から出土している。中世のものとしては、県下でも例の少ない石鍋をはじめ、土師質土器、瓦質土器、須恵器、青磁、染付、土錘、渡来銭(永楽通宝)がピット状遺構内及び遺構検出面より出土した。近世の遺物で注目できるものに、大量の土師質土器(かわらけ)、焼塩壺(10点)がある。土師質土器は上述の土坑よりまとめて出土し、これらは伴出の肥前系陶磁器から年代の特定が可能であり、この時期の基準資料になると思われる。焼塩壺は前年度の調査における動物骨、魚骨等の植物残滓出土と併せて「御台所屋敷」跡の性格に接近する資料とも捉えられるが、更に慎重な検討が必要である。この他に肥前系他各種陶磁器、銅銭(寛永通宝)、煙管、鉄釘、鉄製品、大量の瓦(軒丸・軒平・丸・平)の出土があった。特に瓦については詳細な検討が必要である。

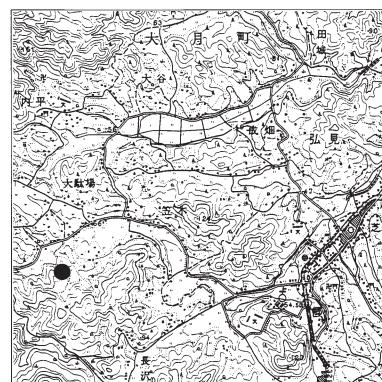


土坑状遺構遺物出土状況(東より)

今次調査によって高知城跡の中世から近世に関する遺構、遺物が確認できた。これらの資料は今後の調査研究に有効な役割を果たすものと考えられる。

ナシケ森遺跡 (94-15 ON)

1. 所在地 幡多郡大月町弘見字ナシケ森
2. 立地 標高約72mから80mの丘陵斜面
3. 時代 旧石器時代～縄文時代
4. 調査期間 平成6年8月11日～10月14日
5. 調査面積 80m²
6. 担当者 門脇隆 (高知県教育委員会)



7. 調査内容 本遺跡は、平成5年度に樹園畑造園の際にできた土層断面より、楔形石器、細石刃等が多数の剥片とともに発見され、ナシケ森遺跡と命名された。今回の調査は、その詳細な性格や範囲及び時代についての基礎資料を得ることを目的として行われた。周辺には、竜ヶ迫遺跡とムクリ山遺跡があり、竜ヶ迫遺跡では発掘調査によって黒色頁岩製のナイフ形石器が出土し、サヌカイト製の横長剥片を素材としたナイフ形石器も表面採取されている。また、ムクリ山遺跡は縄文時代早期から前期に該当する遺物が出土しており、一帯は、旧石器時代から縄文時代にかけての注目すべき地域といえよう。

今回の調査は標高72mから80mの調査対象傾斜地に、磁北ラインに沿って2m×2mのグリッドを基礎としてT字形のトレンチを設定し、人力のみの手作業で発掘を行った。調査対象地域の基本層序は、第Ⅰ層が約20cmから30cmの表土層、第Ⅱ層が約10～30cmのアカホヤ火山灰土層、第Ⅲ層が約10～50cm程度の明黄灰色粘質砂礫土層、第Ⅳ層が珪質頁岩の岩盤層であった。斜面上の80m²という狭い範囲の発掘調査ではあったが、2,580点にもものぼる多量の石器類が出土し、完掘したトレンチの下には、まさに、今回出土した石器類の原材である珪質頁岩の岩盤があった。また、出土した石器類の約96%が剥片とチップで占められていた。それらは、石器製作に伴う性格の遺物であり、数少ない楔形石器、使用痕加工痕のある石器、石核、敲石等とともに、本遺跡が石器生産の原産地遺跡であることを裏づける貴重な出土資料となった。しかし、残念なことに製品となる石器が極めて少量で、しかも、遺跡の時代を確定させる示準となる石器を確認することはできなかった。次期調査では、この成果を踏まえ、出土資料の大半を占めたトレンチ西側以西の範囲を綿密に調査することにより、本遺跡の時代確定がなされ、石器生産遺跡としての詳細が判明するであろう。



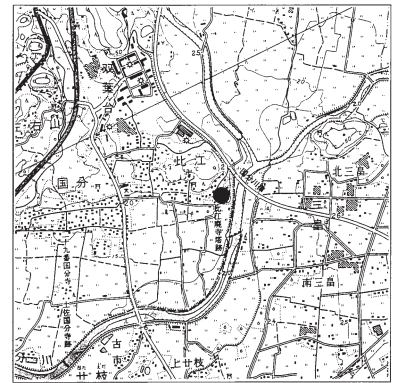
調査区を望む



出現した珪質頁岩の岩盤

ひえはいじ
比江廃寺跡 (94-20 NF)

1. 所在地 南国市比江
2. 立地 国分川右岸の微高地上
3. 時代 白鳳時代～奈良・平安時代
4. 調査期間 平成7年1月9日～3月10日
5. 調査面積 340m²
6. 担当者 松田知彦（高知県教育委員会）・山本哲也
7. 調査内容 比江廃寺跡は白鳳期創建の古代寺院跡で塔心礎が遺存する。「比江廃寺塔跡」として昭和9年1月22日に国史跡に指定され（昭和57年5月21日追加指定），昭和53年度には南国市によって塔心礎周辺が公有化されている。昭和17年に，塔心礎東側から建物建築に伴って多量の瓦が出土し法隆寺式系軒丸瓦・軒平瓦を含む白鳳～奈良時代の瓦類が採集されている。寺院跡の調査としては，1969年に塔心礎周囲を，1989・90年に塔跡東側の工場跡地について発掘調査が行われているが，伽藍配置のきめてになる主要遺構等は検出されていない。土地の字名等から，国分尼寺として転用されたことや，土佐国府跡に隣接することから国府寺として機能していたことなどが推察されているが，今後の検討課題である。なお，伽藍配置の構成についてはこれまで，瓦類の出土位置等から塔の東側に金堂を配した法隆寺式伽藍配置が想定されている。



寺院跡周辺の現状は，主として畑地・田地であるが，最近の土地開発状況の余波をうけて宅地造成工事等の計画がとりだたされてきているところであり，寺院跡の保存方策について早急に検討を加えることが必要となってきた。このため県教育委員会では，当センター及び南国市教育委員会の協力を得て遺構等の内容確認のための計画的な発掘調査を平成6年度から実施することになった。

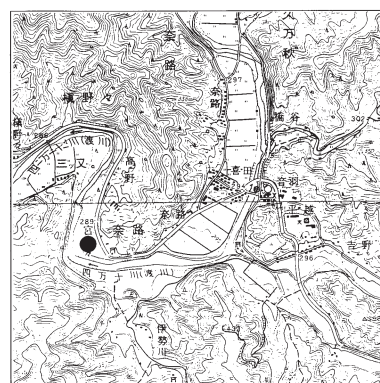
初年度は，塔心礎東側の製紙工場跡地と北側の田地について調査を実施し，工場跡地からは中世の柱穴等が，また北側の調査地からは奈良～平安期の溝跡3条・柱穴，弥生末の竪穴住居跡2棟などが検出された。工場跡地については建物建築工事等による攪乱の度合いが強く，90年の調査時に確認されたような瓦溜まり等は検出されなかったが，北側調査地から奈良～平安期の遺構形成及び包含層の所在が確認され，東西1条・南北2条の溝跡が検出されている。この溝跡は，奈良後半～末頃に形成され平安中頃までには埋没したとみられるもので土師器・須恵器・緑釉陶器・瓦類等が出土した。南北2条の溝跡は幅1.10mと1.8～2.2mで中心間の距離約5.0mを測りほぼ真北方向に並ぶ。溝跡の性格としては，白鳳期の遺構ではなかったものの寺域東限関連の溝の可能性もあり，寺院廃絶期の様相を示す遺構と捉えられる。今後の継続調査の成果と併せて寺院跡の構成についてより詳細な検討を加えることが必要であろう。塔心礎南側及び西側における遺構等の確認作業が期待される。



溝跡

みやのの
宮野々遺跡 (94-21 OM)

1. 所在地 高岡郡大野見村宮野々
2. 立地 四万十川右岸の河岸段丘上
3. 時代 弥生～古墳時代
4. 調査期間 平成6年10月31日～12月2日
5. 調査面積 350m²
6. 担当者 松田知彦 (高知県教育委員会)
7. 調査内容 宮野々遺跡は、大野見村役場のある吉野地区のほど近く、四万十川右岸の低位河岸段丘上に立地している。遺跡付近の標高は290m前後、四万十川からの比高差は約5mである。川は村内で蛇行を繰返し、その作用で形成された段丘上に各集落が営まれている。当宮野々地区でも小集落が北東部の山沿いに細長く展開し、遺跡を含む段丘上は、水田、畑、また花木の苗木生産などに利用されている。



宮野々遺跡は、大野見村役場のある吉野地区のほど近く、四万十川右岸の低位河岸段丘上に立地している。遺跡付近の標高は290m前後、四万十川からの比高差は約5mである。川は村内で蛇行を繰返し、その作用で形成された段丘上に各集落が営まれている。当宮野々地区でも小集落が北東部の山沿いに細長く展開し、遺跡を含む段丘上は、水田、畑、また花木の苗木生産などに利用されている。

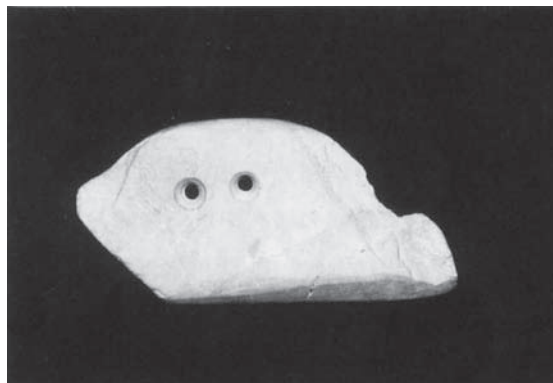
当遺跡は、平成4年度～5年度にかけて行われた遺跡詳細分布調査によって発見され、平成5年度に大野見村の単独事業として試掘調査が行われた。それを受けて本年度、国庫補助対象事業として確認調査が行われたのである。

今次調査では、竪穴状遺構1基、カーボン及び焼土層1ヶ所、土坑及びピット多数が検出された。竪穴状遺構については、遺物は検出されたが柱穴が存在せず、住居跡との確証は持てない。土坑及びピットについても時期が確定できるものは少なく、性格については不明な点が多い。

出土した遺物は土器が細片も含め数百点、石包丁と石錘各1点である。土器は弥生中期に属する土器を中心としているが、現在のところ凹線文手法及び櫛描文のあるものは確認しておらず、複合口縁を持つものと頸部に粘土帯を貼付したものが散見される。又、明らかに弥生後期後半或は古墳時代初頭に位置付けられる土器が混入しており、遺跡の時期の決定には慎重にならざるを得ない。ただ、弥生中期の同時期の土器が近隣の窪川町や葉山村からも出土しており、伊野町バーガ森遺跡や野市町本村遺跡等県中央部との関連も含め、当地域の弥生時代史を考えていく上で重要な発見といえよう。調査は平成7年度も継続して行われる予定であり、集落跡の発見を始め遺跡の全体像が明らかにされることを期待する。



出土土器



出土石包丁

そが
曾我城跡 (94-22 SC)

1. 所在地 幡多郡大方町浮鞭城ノ谷口843～873
2. 立地 丘陵
3. 時代 中世
4. 調査期間 平成6年10月17日～12月27日
5. 調査面積 384m²
6. 担当者 山崎正明・竹村三菜
7. 調査内容 今回の調査では谷部と丘陵部の2ヶ所を調査した。谷部については城主の土居や弥生時代の遺跡が存在するのではないかという前提で確認調査を行なったもので、丘陵部では遺構・遺物の検出及び所謂山城の縄張りの範囲や残り具合又はその性格・深度・作業量や掘削土量の見通し等に至るまで本調査に向けてのあらゆる情報を得る事を目的とした試掘調査である。



曾我城跡は湊川下流域の右岸に向けて丘陵の一部が南東方向へ派生した場所に立地している。両サイドは深くまで谷地形が発達し、眼下には河口を望むことができる。標高43～45m前後の詰を中心としてこれに付随するかのよういくつかの曲輪が構築されている。全体的には北側の残りがよく、南斜面は後世の畑として利用された為か削平・改変が強いようである。しかしこれらも城を防御するうえで欠かすことのできないものであり、城の縄張りから外す事ができないものである。近年は城と土居とのセット関係、又は城と河川との関わりや流通論が注目されておりその成果も報告されはじめている。大方町における山城の分布状況を見ても6つの中小河川沿いにあり、その重要性を看取することができると共に城の機能した時代の地域の中心人物にも注目しないといけな



曾我城跡遠景

して、概ねその年代は15世紀後半から16世紀前半の範疇で捉えることができる。しかし前述した中心部分を外したことにもよるが、出土遺物は非常に少なかった。このことは城の機能・性格及び存続期間や争いの有無等についても考えなければならない。谷部の調査においては土居の確認はできなかったが表面観察において堀切・竪堀・土塁や自然の堀としての役割と思われる谷部、さらには防御的に重要と思われる曲輪や箇所が看取でき、今後の本調査での成果が期待される。

まつのき
松ノ木遺跡 (94-25 MMV)

1. 所在地 長岡郡本山町寺家
2. 立地 吉野川上流左岸中位段丘縁部 標高250m
3. 時代 縄文時代～古墳時代・中世
4. 調査期間 平成6年11月28日～平成7年3月31日
5. 調査面積 約550m²
6. 担当者 前田光雄



7. 調査内容 松ノ木遺跡は今回の調査で5度目の調査となる。平成2年度の際、工事中に発見されて以来、縄文時代後期の多量の土器、縄文時代後期の竪穴住居跡、弥生時代から古墳時代にかけての集落跡等が検出され、四国山間部の遺跡としてはかつて知られなかった内容であり、ここ数年注目を浴びてきた。

平成2年度に検出されていた「土器捨て場」の続きの部分に約50m²の調査区1区を設定し、昨年度調査の弥生時代から古墳時代の集落が検出されている部分の南側約500m²に2区の調査区を設定した。2区では古墳時代の竪穴住居跡4棟が検出され、弥生時代から古墳時代にかけての住居跡は合計14棟となった。集落はさらに調査区の東方向に広がりを見せており、弥生時代後期後半から古墳時代前半まで継続性が認められるようである。今回、高知県内で古墳時代初頭のヒビノキⅢ式期の住居跡に伴って徳島県の東阿波型土器が出土していることは注目される。

「土器捨て場」からは平成2年度と同等以上の縄文時代後期前半の土器群が多量に出土している。完形品は少ないものの、文様構成の分かるものも500点以上出土しており、型式名で言えば本遺跡を標本とする松ノ木式が圧倒的に多く、松ノ木式の前段階の宿毛式・福田KⅡ式、そして松ノ木式に後続すると考えられる未命名の型式群が新たに出土している。小区分としては3時期に互る型式群の出土が判明している。未命名の一群の土器には西南四国に展開する平城Ⅱ式、瀬戸内の津雲A式、香川県のなつめの木貝塚、また山陰の布施式に近いもの等が出土している。「土器捨て場」の調査区内での最深部の深さは3.5mにも及び、層位も100層近く分層できるものの、これらの3時期に互る土器群は層位的に明確に分かれるものではなく、今後の整理作業によってある程度の層位的傾向の把握に努める必要があると見られる。土器以外に石器としてはサヌカイト製の石鏃が400点余りと縄文後期としては異例の多さで出土している。また多量の炭化種子、珧状耳飾り、滑石製小玉等、多岐にわたるものの有機物遺物の遺存は認められなかった。



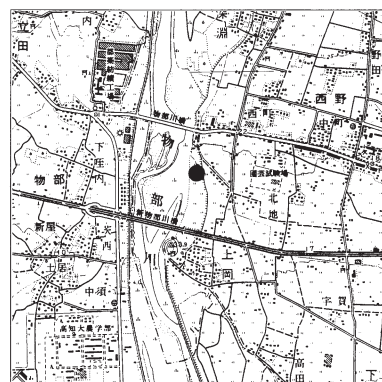
遺物出土状態



縄文後期土器

しものつぼ
下ノ坪遺跡 (94-29 NS)

1. 所在地 香美郡野市町上岡
2. 立地 物部川下流域の沖積平野
3. 時代 弥生時代～平安時代
4. 調査期間 平成7年1月5日～3月15日
5. 調査面積 1,200m²
6. 担当者 池澤俊幸・小松大洋 (野市町教育委員会)
7. 調査内容 当遺跡では、南部に町文化財に指定された条里遺構が、比較的良好な状態で遺存していることが知られてきた。しかし、発掘調査は行われておらず、遺跡の内容は不明であった。



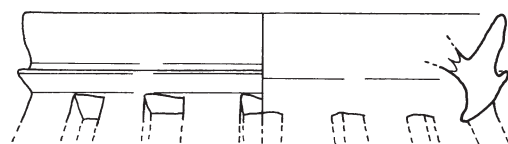
今回の調査は、団体営圃場整備事業に伴い、野市町教育委員会が主体となって実施した。耕地部分は遺跡が保存される工法が用いられるため、本調査は道路と水路部分に絞って行われた。その結果、弥生時代後期の竪穴住居跡1棟、土坑1基、古墳時代後半～末頃の竪穴住居跡4棟、溝3条、奈良時代頃の掘立柱建物1棟、柱穴、流路、平安時代の溝7条、ピット等の遺構とそれらに伴う遺物、また包含層からも弥生土器、須恵器、土師器等が多量に出土した。

まず、古墳時代の竪穴住居では、4棟全てにカマドを確認することができた。カマドは3棟では北壁中央に、残る1棟では東壁中央につくり付けられており、時期も異なっている。構造は、河原石を立てて芯とし、粘質土を盛り上げたものである。埋土中や周辺からは、甗、甕、蓋杯、高杯、小動物の骨片等が出土した。炊飯様式の変革としてのカマドの出現・展開は、一般的には5～6Cに見られる文化、社会構造の変化の中で捉えられる。今回の良好な遺構の検出は、当地域のカマドの構造について重要な資料となるものである。

奈良時代後半頃では、流路や包含層から多量の須恵器等が出土した。また、緑釉陶器や下に図示した円面硯のように、官衙的性格の強い遺物も出土している。当遺跡の北方約700mには、同様の遺物が出土した深淵遺跡が存在し、そのさらに北方約900mには、本年度の調査で平安時代後半を中心とする遺物が出土した深淵北遺跡が存在する。これら各地区の検討により、当時期の物部川下流域の様相を、より豊かに再現できるものと思われる。



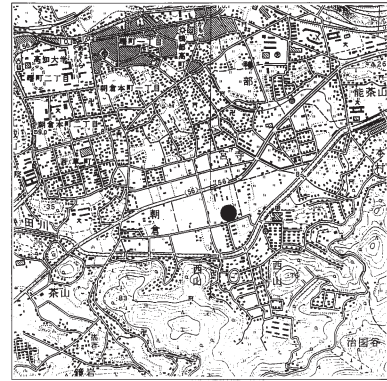
カマド周辺遺物検出状況



円面硯

やなぎだ おきた
柳田遺跡沖田地区 (94-8 KY3)

1. 所在地 高知市朝倉字沖田
2. 立地 鏡川水系・沖積地
3. 時代 縄文時代～近世
4. 調査期間 平成6年10月25日～12月17日
5. 調査面積 1,088m²
6. 担当者 曾我貴行・田上浩



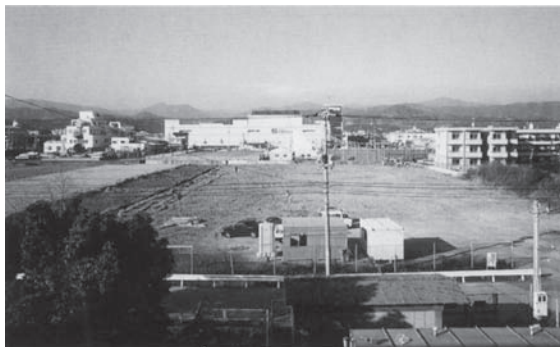
7. 調査内容 本年度の柳田遺跡確認調査の三件目で、遺跡範囲のほぼ中央に位置しており、平成四年度調査対象地から距離的に近く、成果が期待された地区である。約7,500m²の調査対象地内に7m×7mを基本とするTPを21ヶ所設定した。いずれのTPとも層序は似通っており最上層から順に、整地用の客土層→旧表土（水田耕作土）層→水成堆積による粘土層→青灰色砂・砂礫層→褐色礫砂層となっている。最後の褐色礫砂層上面は不整合面であると考えられる。

客土層及び旧表土層からは、中世から近世にかけての陶磁器・土師質土器・窯道具・獣歯牙片などが出土したが、あまり良好な出土状態とは言い難い。また旧表土層も含めて、他地域からの客土である可能性もあり、これらの時期の遺跡の存在についてはやや疑問が残る。

粘土層においては調査対象地北西隅のTP-19において溝状遺構・杭跡（2基）・及び溝状遺構の埋土層中に足跡（1基）・ピット状遺構（1基）等を検出した。溝状遺構の検出面は標高4.3mである。溝状遺構からの出土遺物は弥生時代前期以前のもの一土器44点、石器2点（小型石斧・石包丁）、植物遺存体一で占められており、平成四年度の調査で検出された自然流路との関連が予想される。また、足跡の埋土からも弥生土器片が出土した。また、TP-8・9・10・12において青灰色砂・砂礫層の上面に接するかたちで、大きい自然木（最大のものは長さ2m）が粘土層下部から出土している。

青灰色砂・砂礫層においては、TP-8で縄文土器1点が出土している。

最下層の褐色礫砂層においては、径20cm程度のピット状遺構をTP-6で3基（検出面標高2.9m）、TP-18で1基（検出面標高2.3m）検出した。遺物は伴わないものの掘り方はしっかりしており、また埋土は直上の層のものとは異なっており、層位的な観点からみればTP-19の遺構との関係から、少なくとも弥生時代よりも時期的に古いものであろうと考える。



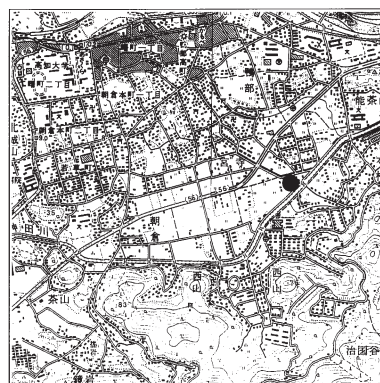
全景



溝状遺構完掘

やなぎだ こうじはら
柳田遺跡 粧原地区 (94-6 KY1)

1. 所在地 高知市朝倉字粧原
2. 立地 鏡川水系・沖積地
3. 時代 古墳・古代・中世
4. 調査期間 平成6年6月6日～7日
5. 調査面積 24m²
6. 担当者 曾我貴行・田上浩



7. 調査内容 柳田遺跡は東西約1 km南北約500 mに及び、高知市内でも最大級の遺跡であるが、近年都市化が進み急速にその姿を変えようとしている。本年度も数件の開発計画があり、そのうちで規模が比較的大きく、遺跡に影響を与えるおそれのあるものについて、四件の確認調査を実施した。この粧原地区はその第一件目であり、遺跡範囲の東端に当たる。今回の調査では、調査対象地約1,000m²内の三ヶ所に、2 m×4 mを基本とする TP を設定して調査を行った。各 TP とも地表下約20cmまでは水田耕作土であり、それ以下は最高で3 m程度掘り下げてみたが、旧河川流路とみられる砂礫層が堆積しており、遺構は検出できなかった。砂礫層から若干の遺物（土師器・須恵器・土師質土器など—古墳時代から中世）が出土したが、それらの出土状態をみる限りでは、砂礫層が遺物包含層を形成しているものとは考えがたい。また、出土土器の破断面がローリングを受けて丸みを帯びていることから、河川の運搬作用によって、より上流域から流されてきたものと考えられる。なお、河川の堆積深度から考えると、北方が上流方向とみられる。

以上のように、本調査対象地は遺跡の中心部には当たらないが、ほど遠くない位置に遺跡の本体が存在することが推察される。また、これまで本遺跡の存続期間は古墳時代までとみられてきたが、今回古代から中世にかけての遺物が出土したことにより、遺跡の存続期間が広がった。

やなぎだ なかのつぼ
柳田遺跡中ノ坪地区 I (94-7 KY2)

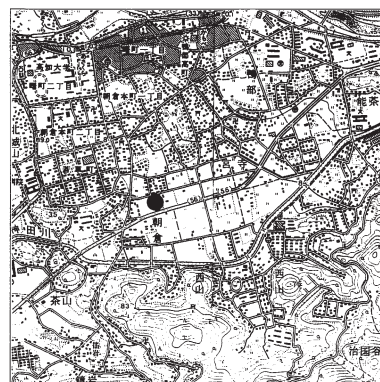
1. 所在地 高知市朝倉字中ノ坪
2. 立地 鏡川水系・沖積地
3. 時代 —
4. 調査期間 平成6年8月2日
5. 調査面積 24m²
6. 担当者 曾我貴行



7. 調査内容 本年度の柳田遺跡確認調査の二件目で、柳田遺跡の範囲内では北西部に位置している。調査対象地の面積は約1,000m²で、2 m×4 mを基本とする TP (TP-3は2×2.5) を三ヶ所設定した。いずれの TP とも現地表面は近年の客土によるものであり、標高6.2m付近から下が自然堆積層とみられる。堆積状況は各 TP 共下方に向かって粘土→細砂→砂礫という順序から河川等の運搬作用によって形成された水成堆積と考えられる。なお、各堆積層の深度によって、北側が上流もしくは浅瀬側、南側が下流もしくは流れの中心方向であろう。各 TP とも明確な遺構・遺物ともに認められなかった。

やなぎだ なかのつぼ
柳田遺跡中ノ坪地区Ⅱ (94-27 KY4)

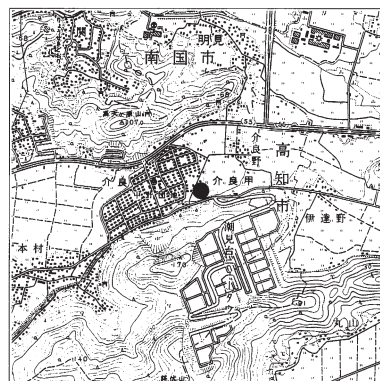
1. 所在地 高知市朝倉字中ノ坪
2. 立地 鏡川水系・沖積地
3. 時代 縄文時代～近世
4. 調査期間 平成6年12月19日～12月26日
5. 調査面積 140m²
6. 担当者 曾我貴行・田上浩



7. 調査内容 本年8月に実施した中の坪地区の西に隣接した約1,400m²が調査対象地である。5 m × 5 mを基本とする TP を五ヶ所設定した。各 TP 共表土層の下には厚い粘土層が続いており、遺物・遺構ともに確認できなかった。しかしながら、調査対象地北半の三ヶ所の TP において、自然流路跡とみられる砂礫まじりの層があり、その上下の層から近世陶磁器(少量)・土器(縄文～中世)・土製品(中世のものと思われる土錘)・木製品などの遺物が出土した。土器は古墳時代以前の物が多く、特に縄文土器(後期)は本年度の柳田遺跡の調査対象地中では比較的出土量が多い。木製品は杭と、何かの部材の一部と考えられる細長い板状のもので、一部分に焼けた跡が残る。また杭は、杭列として立った状態のままでも検出されており、流路の肩部に配されたと考えられる。

けらなかの
介良中野遺跡 (94-16 KN)

1. 所在地 高知市介良字二ツ池
2. 立地 下田川水系・沖積地
3. 時代 近世
4. 調査期間 平成6年9月26日～9月27日
5. 調査面積 50m²
6. 担当者 曾我貴行・田上浩



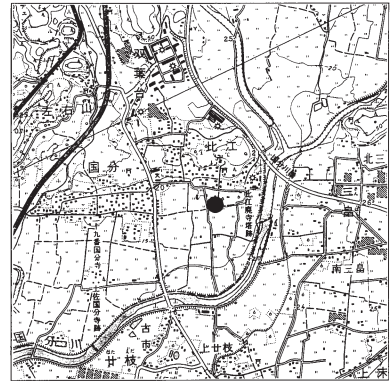
7. 調査内容 本遺跡付近を流れる介良川は、もと五台山の北側を西流して浦戸湾に至っていたものを、江戸時代に下田川に注ぐように付け替えたものである。また、さらに古い時代には物部川が本遺跡付近で浦戸湾に流入していたらしい(「高知県の地名(平凡社)」)。今回の調査は個人住宅の建設に伴う確認調査で、約3,000m²の調査対象地内に2 m × 4 mを基本とする六ヶ所の TP を設定した。

土層の堆積は各 TP 共ほぼ同じで、整地のための客土 → 旧水田耕作土 → 水成堆積による粘土 → 赤褐色礫(湧水、標高約2.0m)の順に変化する。北東端の TP-1(標高3.0m)及び南端の TP-6(標高2.8m)の粘土層において幅50cmの溝状遺構を検出した。この二つはつながる可能性が高いが、遺物を伴わなかったのが年代的には不明である。また、旧水田耕作土層より主として近世の土師質土器・陶磁器が若干出土した。中世以前と見られる遺物は小断片が一点のみである。遺物の出土状態からみて、近世の集落が近辺に存在する可能性はあるものの、それ以前については確実なことはいえない。

とさこくふ

土佐国府跡 (94-18 TK)

1. 所在地 南国市比江字一和尚
2. 立地 国分川右岸の微高地上
3. 時代 奈良～平安時代
4. 調査期間 平成6年10月3日～10月12日
5. 調査面積 110m²
6. 担当者 横井理恵・竹口和則 (南国市教育委員会)・山本哲也
7. 調査内容 個人宅地造成工事に伴い工事予定区域についての調査が行われた。土佐国府跡は



律令期の官衙跡で、これまで数次にわたる発掘調査が実施されている (土佐国衙跡の調査)。関連遺構の掘立柱建物跡群・溝跡等が検出されているが、政庁域などの主要遺構は確認されていない。

調査地は、推定府域の北西部に該当し、府域西限に関係した遺構等の検出が期待されていた。調査の結果、掘立柱建物跡3棟が検出され古墳時代後期～平安時代にかけての土器片 (須恵器・土師器) が出土した。建物跡 (SB1～3) の方位は、磁北に対して12°～36°東側に振り、調査区の南で検出のSB1・2は切り合いを有していた。SB1・2は二間×三間の建物で、SB1が先行する。また、SB3は二間×三間以上の建物跡である。検出遺構は倉庫群の一部とみなされる。

いわむら

岩村遺跡群 (94-19 NI)

1. 所在地 南国市岩村
2. 立地 物部川右岸の微高地上
3. 時代 弥生末～奈良・平安時代, 鎌倉末～戦国時代
4. 調査期間 平成6年10月17日～平成7年3月25日
5. 調査面積 256m²
6. 担当者 横井理恵・竹口和則 (南国市教育委員会)・山本哲也
7. 調査内容 岩村地区県営圃場整備事業計画に伴い、当該工事計画区域内に所在する岩村土居城跡及び岩村遺跡 (岩村遺跡群) について、遺跡の範囲及び内容等確認のための試掘調査が行われた。



岩村土居城跡は、佐伯経貞軍忠状 (建武三年五月一日, 佐伯文書) に見られる岩村之城に該当すると考えられる城館跡で、土塁及び堀等の所在を示す地形が遺存する他、城跡関連の地名が残る。県下の中世城館跡の中でも成立期が古く、城館の初相を探る資料として注目される。また、岩村遺跡は弥生末～奈良・平安時代の遺物散布地で、岩村土居城跡の北側に一部城跡と重複しながら広がる遺跡である。調査の結果、両遺跡は岩村土居城跡から北側にかけて形成されているものと推察され、城跡内の調査区から溝跡・土坑・柱跡などを検出し、青磁・白磁・染付・瓦質土器・土錘等が出土した。また、岩村遺跡ではベット状遺構を持つ弥生後期末の竪穴住居跡1棟・溝跡1条・柱穴及びピット、奈良～平安期の溝跡・柱穴などを検出し須恵器・土師器等が出土した。

この結果、工事等で影響を受ける部分について事前の本発掘調査を実施することが必要となった。

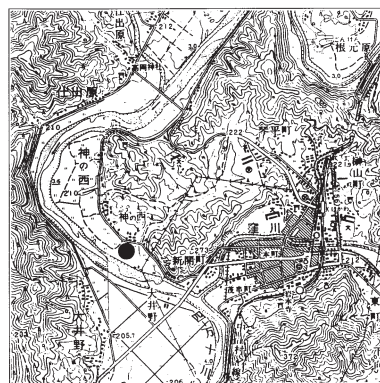
くぼかわせいぶ

窪川西部遺跡群 (94-24 KS)

1. 所在地 高岡郡窪川町神の西・家地川
2. 立地 四万十川によって形成された河岸段丘上
3. 時代 縄文・弥生・古墳・中世
4. 調査期間 平成6年10月6日～11月11日
平成6年12月5日～12月12日
5. 調査面積 660m²
6. 担当者 寺川嗣 (高知県教育委員会)
7. 調査内容 窪川西部遺跡群は(神の西)古墳時代・弥生時代の散布地,(家地川)中世の城

として発見された遺跡であるが、今回の調査は、県営圃場整備事業によって影響を受ける当遺跡について事前の発掘調査を行い、時代・性格及び範囲等の確認を目的として実施した。この調査により出土した遺物は神の西地区より縄文土器(縄文時代後期前半)約40点あまりである。縄文土器の特徴としては沈線、磨り消し縄文などから宿毛タイプに分類できる。家地川地区からは中世甕(備前)及び輸入陶磁器(青磁)が出土した。

今回の調査により、神の西遺跡は弥生・古墳時代より更に遡る縄文時代にかけての遺跡であると判明したことは、収穫であったといえよう。



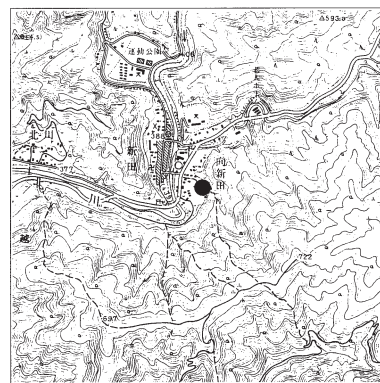
縄文後期土器片

ひがしがわ

東川遺跡 (94-26 HH)

1. 所在地 高岡郡東津野村東川
2. 立地 北川川左岸舌状台地上
3. 時代 縄文時代
4. 調査期間 平成6年12月7日～12月8日
5. 調査面積 50m²
6. 担当者 松田知彦 (高知県教育委員会)
7. 調査内容 今回の調査は、当地において「中山間地狭地直し事業」が実施されるため、それ

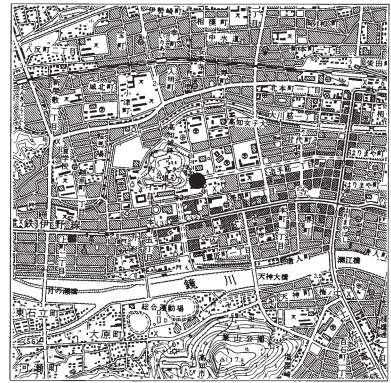
に先立ち時代・性格及び範囲等を確認する目的で実施した。当遺跡では、平成5年度に行われた遺跡詳細分布調査の際に石鏃1点が表採されており、地形的にも縄文時代の遺跡としての立地条件を備えている。調査により出土した遺物は石鏃が6点と剝片が数点で土器は検出できなかった。石質はサヌカイト・チャート及び頁岩であり、すべて表土層からの出土である。表土下には赤ホヤが二次堆積しており、最下層は礫層となっている。時期については、土器が出土していないため特定できない。なお、遺構については皆無の状態であった。



試掘トレンチ完掘状態

こうち おおてもん
高知城跡 追手門堀 (94-23 KC)

1. 所在地 高知市丸ノ内
2. 立地 独立丘陵
3. 時代 近世
4. 調査期間 平成6年11月15日～11月17日
5. 調査面積 26m²
6. 担当者 森田尚宏
7. 調査内容 高知城跡の堀については、従前から石垣の改修及び堀底の浚渫を行っているところであるが、今回追手門前の部分の改修を行うこととなった。現在、追手門前は暗渠により北と南の堀が繋がっているが、改修前にその状況の確認調査が必要となった。調査は暗渠を中心に行ったが、暗渠自体は戦後の改修により造られたものであり、近世遺構の確認はできなかった。また、石垣部分についても石垣裏は裏込めもなく、近代以降に積んだものと考えられる。

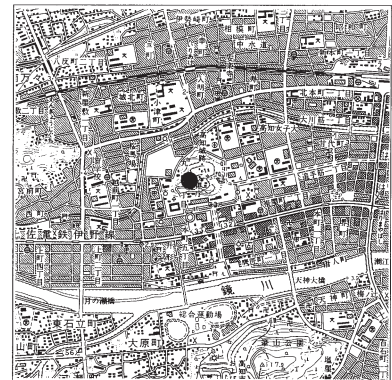


堀 暗渠

こうち みだいどころ やしき きたいしがき
高知城跡御台所屋敷跡北石垣 (94-31 KC II)

1. 所在地 高知市丸ノ内
2. 立地 大高坂山中腹 (標高23m)
3. 時代 近世
4. 調査期間 平成7年3月6日～3月10日
5. 調査面積 38m²
6. 担当者 曾我貴行
7. 調査内容 高知城跡御台所屋敷跡 (高知市立動物園跡地) 整備事業の一環として実施される当該石垣の改修整備に先立ち、石垣の正確な遺存範囲の把握を目的として、今次調査は実施された。調査は、地表面観察で確認できる石垣の西端付近とその西側の2箇所(斜面)に直交する試掘溝(トレンチ)を設定し、石垣裾部の状況、及び石垣・根石の有無の確認を試みた。

調査の結果、石垣は東から西へと、岩盤成形を回避しながら構築され、岩盤面と石垣上端レベルが遭遇した箇所(斜面)で構築を終えている。また、斜面下部では石垣ラインよりも北方に張り出した岩盤面が確認でき、これ以西は切り岸等の成形を施した斜面地形であったものと考えられる。以上、御台所屋敷跡の性格・機能等にも大いに関わる重要な成果が得られたと評価できよう。



トレンチ完掘状況

すえ

須江ツカアナ古墳 (94-28 YST)

1. 所在地 土佐山田町須江字ツカアナ
2. 立地 新改川左岸中位段丘
3. 時代 古墳時代
4. 調査期間 平成6年12月12日～平成7年1月13日
5. 調査面積 1,400m²
6. 担当者 中山泰弘(土佐山田町教育委員会)
7. 調査内容 山田北部地区県営圃場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査である。本古墳は、大正時代に破壊され昭和50年代まで径15～16mの円形をした畔界が存在するのみであったが、発掘調査の結果、古墳は玄室及び羨道部分の床面が残っていることが判明した。横穴式石室の長さは約8.50m、幅2.20mで床面からは須恵器片、耳環、金銅製品片、鉄鏃が出土した。

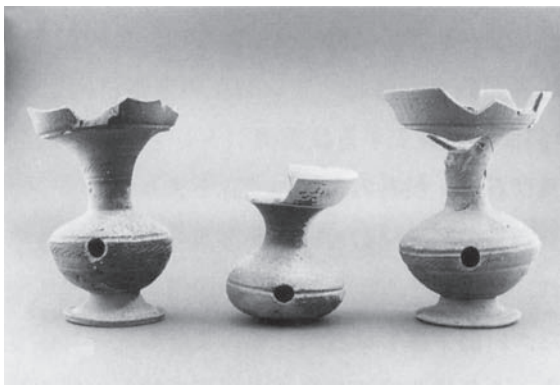
古墳入口の前庭部からは四つの柱穴が検出され、その柱穴の四隅内からは高坏、甕、甗、台付甗が出土し、墓前祭祀跡と考えられる。また前庭部より溝跡が逆“の”の字で古墳を $\frac{3}{4}$ 程度巡り、周溝を呈している。周溝の最大幅5.50m、深さ1.20mで、本古墳は周溝を含み東西約32m、南北約28mの円墳であることが確認された。



古墳全景



横穴式石室検出状態

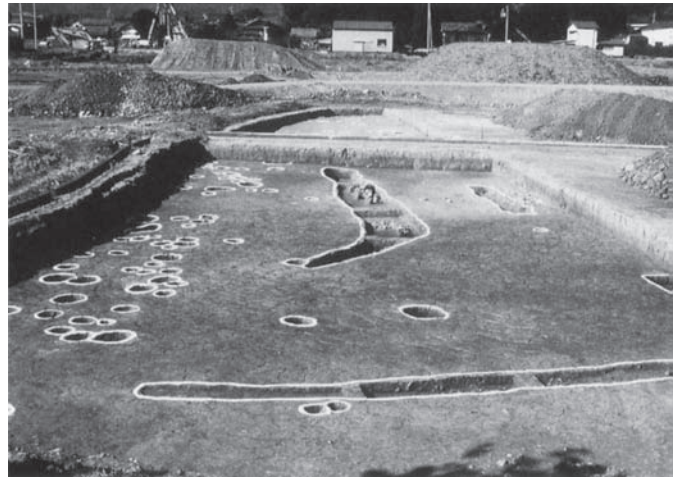
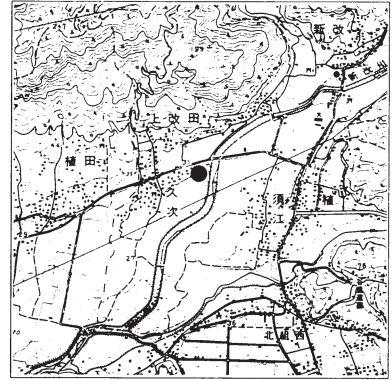


古墳前庭部出土須恵器

かみかいだ

上改田遺跡 (94-30 YKU)

1. 所在地 土佐山田町上改田字^{うしろいげ}後神母他
2. 立地 新改川右岸中位段丘
3. 時代 古墳時代～中世
4. 調査期間 平成6年9月14日～12月16日
5. 調査面積 1,000m²
6. 担当者 中山泰弘 (土佐山田町教育委員会)
7. 調査内容 新改西部地区県営圃場整備事業に伴う試掘調査により遺構・遺物等が確認された。今回、試掘調査の結果を踏まえ、平成6年度工事施工予定地内に現状保存が不可能な箇所を中心に発掘調査を実施した。調査の結果、古墳時代後期の土坑2基、奈良時代後期の溝跡3条、柱穴、中世の柱穴等の遺構が検出された。出土遺物は須恵器(坏・埴・皿・甕)、土師器(高坏・皿・埴)、土師質土器(坏)、備前焼等が出土した。

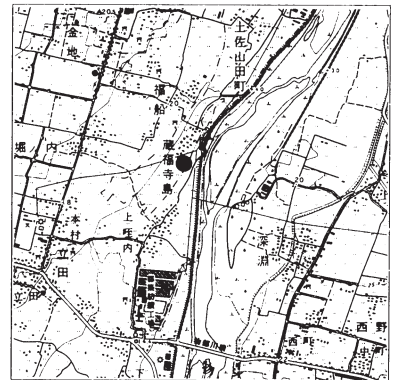


C区遺構完掘状態

いわむらちく

岩村地区遺跡群 (94-32 YI)

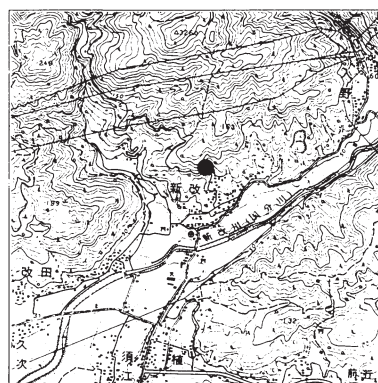
1. 所在地 土佐山田町蔵福寺島字ヲサガ測他
2. 立地 沖積平野
3. 時代 奈良時代～中世
4. 調査期間 平成7年3月1日～3月25日
5. 調査面積 240m²
6. 担当者 中山泰弘 (土佐山田町教育委員会)
7. 調査内容 岩村地区県営圃場整備事業に伴う事前の埋蔵文化財確認調査である。圃場整備施工予定地内に60ヶ所のグリッド(2m×2m)を設定し試掘調査を行った。調査の結果、遺構は確認されなかったが極少量の磨滅した土師質土器が出土した。



はやしのたにいちごうよう

林ノ谷1号窯跡 (94-17 YH1)

1. 所在地 土佐山田町新改字林ノ谷388番地
2. 立地 丘陵
3. 時代 奈良時代
4. 調査期間 平成6年7月14日～9月16日
5. 調査面積 65m²
6. 担当者 中山泰弘 (土佐山田町教育委員会)
7. 調査内容 新改地区周辺には、国指定史跡である南国市の比江廃寺跡や土佐国分寺跡の瓦を焼成した古代の窯跡が分布しているが、その大部分の実態は不明である。今回、比較的形が残っている林ノ谷1・2・3号窯が風雨に曝れ自然崩壊が進行しつつあったため緊急調査を実施した。調査の結果、全長約9mの舟底状を呈した窯跡を確認した。窯跡は煙出し部分で西側に曲がっていた。灰捨場は焚口より南側に存在し、多量の炭、須恵器 (蓋・甕・埴・皿) が出土した。

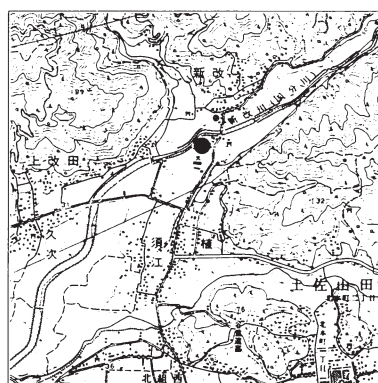


1号窯跡検出状態

すえきた

須江北遺跡 (94-33 YSK)

1. 所在地 土佐山田町須江字コウロンボウ他
2. 立地 新改川左岸中位段丘
3. 時代 古墳時代～平安時代
4. 調査期間 平成6年10月1日～10月31日
5. 調査面積 72m²
6. 担当者 中山泰弘 (土佐山田町教育委員会)
7. 調査内容 山田北部地区県営圃場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査である。コウロンボウ地区並びに慶長19年(1614)の銘がある「須江時光石供養塔」を中心として2m×2mのグリッドを18ヶ所設定し、発掘を実施したが、遺構は確認されず、わずかに土師質土器片が数点出土した。



V 条例・規則・規程等

高知県条例・規則

1. 高知県立埋蔵文化財センターの設置及び管理に関する条例

(平成3年度3月20日条例第3号)

高知県立埋蔵文化財センターの設置及び管理に関する条例をここに公布する。

高知県立埋蔵文化財センターの設置及び管理に関する条例

(設置)

第1条 埋蔵文化財を発掘し、保存し、及び公開することにより、埋蔵文化財に対する知識を深め、もって県民文化の振興に寄与するため、高知県立埋蔵文化財センター（以下「センター」という。）を南国市に設置する。

(管理の委託)

第2条 教育委員会は、センターの管理に関する業務を財団法人高知県文化財団に委託することができる。

(委任)

第3条 この条例に定めるもののほか、センターの管理に関し必要な事項は、教育委員会規則で定める。

附 則

この条例は、平成3年4月1日から施行する。

2. 高知県立埋蔵文化財センターの設置及び管理に関する条例施行規則

(平成3年3月26日教育委員会規則第5号)

高知県立埋蔵文化財センターの設置及び管理に関する条例施行規則をここに公布する。

高知県立埋蔵文化財センターの設置及び管理に関する条例施行規則

(趣旨)

第1条 この規則は、高知県立埋蔵文化財センターの設置及び管理に関する条例（平成3年高知県条例第3号）第3条の規定に基づき、高知県立埋蔵文化財センター（以下「センター」という。）の管理について、必要な事項を定めるものとする。

(センターの利用)

第2条 センターを利用しようとする者（第4条において「利用者」という。）は、センターに保存されている埋蔵文化財及び保管されている埋蔵文化財に関する資料（第4条において「埋蔵文化財等」という。）の観覧、閲覧、撮影又は模写等を行うことができる。

(利用時間)

第3条 センターの利用時間は、午前8時30分から午後5時までとする。

2 教育委員会は、前項の規定にかかわらず、特に必要と認めるときは、同項の利用時間を変更す

ることができる。

(遵守事項)

第4条 利用者は次に掲げる事項を守らなければならない。

- 1 センターの施設、設備若しくは埋蔵文化財等を損傷し、又はそのおそれのある行為をしないこと。
- 2 他の利用者に迷惑を及ぼす行為をしないこと。
- 3 前2号に掲げるもののほか、センターの管理上必要な指示に反する行為をしないこと。

(休所日)

第5条 センターの休所日は、次に掲げるとおりとする。ただし、教育委員会が特に必要と認めるときは、これを変更し、又は臨時に休所日を設けることができる。

- 1 日曜日及び土曜日
- 2 国民の祝日に関する法律（昭和23年法律第178号）に規定する休日
- 3 1月2日から1月4日まで及び12月28日から12月31日まで

(委任)

第6条 この規則に定めるもののほか、センターの管理及び運営に必要な事項は、教育長が別に定める。

附 則

この規則は、平成3年4月1日から施行する。

附 則

この規則は、平成4年7月18日から施行する。

財団法人高知県文化財団規程

3. 財団法人高知県文化財団組織規程

第1章 総則

(趣旨)

第1条 この規程は、財団法人高知県文化財団（以下「財団」という。）の組織に関し必要な事項を定め、財団事務の適正かつ能率的な執行を図ることを目的とする。

(組織)

第2条 財団に事務局を置く。

- 2 事務局に右の表に掲げる機関を置き、その内部組織として課を置く。
- 3 理事長は、必要があると認めるときは、課に班又は係を置くことができる。

機 関	課 名
総 務 部	総務課
美 術 館	事業課・学芸課
歴 史 民 俗 資 料 館	事業課・学芸課
埋 蔵 文 化 財 セ ン タ ー	総務課・調査課
坂 本 龍 馬 記 念 館	
文 学 館 開 設 準 備 室	

第3章 事務分掌

(埋蔵文化財センターの分掌事務)

第8条 埋蔵文化財センターの分掌事務は、次の各号に掲げるとおりとする。

- (1) 受託した高知県立埋蔵文化財センターの管理運営に関する事。
- (2) 所の予算及び決算に関する事。
- (3) 所の文書及び公印に関する事。
- (4) 所の職員の服務及び福利厚生に関する事。
- (5) 埋蔵文化財の調査研究に関する事。
- (6) 埋蔵文化財の整理保存に関する事。

附 則

- 1 この規程は、平成3年4月1日から施行する。
- 2 財団法人高知県文化財団組織規程（平成2年4月1日制定）は、廃止する。

附 則

この規程は、平成3年7月1日から施行する。

附 則

この規程は、平成3年9月6日から施行する。

附 則

この規程は、平成3年11月15日から施行する。

附 則

この規程は、平成5年4月1日から施行する。

高知県埋蔵文化財センター年報 4

1994年度

発行日 平成7年7月1日

編集・発行 (財)高知県文化財団
埋蔵文化財センター

印刷 (有)西村謄写堂